2014年11月10日第537号
©日本記者クラブ 2014

日本記者クラブ会報

公益社団法人　日本記者クラブ　〒100-0011　東京都千代田区内幸町2-2-1　日本プレスセンタービル　TEL.03-3503-2722　http://www.jnpc.or.jp/

△撮影：関田　航
（朝日新聞東京本社写真部）

撮影：高橋雄大▷
（朝日新聞名古屋本社報道センター）

「21世紀照らす」ノーベル物理学賞

写真右：青色LEDライトを手に会見する赤崎勇・名城大教授(左)と天野浩・名古屋大教授=10月10日、名古屋大学
写真左：一時帰国し、インタビューに答える中村修二・米カリフォルニア大サンタバーバラ校教授=10月17日、東京都新宿区

特別賞　幅広く推薦を　クラブ賞候補　募集始まる

日本記者クラブ賞とクラブ賞特別賞の募集が今年も始まった。候補の推薦をよびかける案内を今月、プレス会員全員に送る。来年1月末、応募を締め切り、推薦委員会と選考委員会が2段階で審査を重ね、4月の理事会で受賞者が決まる。

特別賞は「原則として会員・会員社以外」が対象だが、創設3年目の今年は受賞者が出なかった。推薦される候補が少なく、推薦を増やす方策をたてることが懸案となっていた。

10月23日の総務委員会と27日の理事会は特別賞の内規を改定した。推薦権は会員だけが持つ規定だったが、特別賞について、新聞協会・民放連加盟社に属する方ならクラブ会員でない場合でも候補を推薦できるようになった。「選考基準」の項目では特別賞の性格を説明した。第1次審査にあたる推薦委員も増やす。

毎年、受賞者が出ることで特別賞のイメージもはっきりしてくるだろう。幅広い候補の推薦をお願いしたい。（28ページに募集案内）　（中井良則）

今月のことば

「占領時代、日本はプラグマティズムを重んじるアメリカの民主主義を採り入れた。日本人の心情にはあったが、普遍的な民主主義を考えさせるものではなかった」
保阪正康さん（10・7）　14ページ

「I survived. I'm here. I'm talking to you.」
ダレル・スタークさん（91歳。比バターン半島で日本軍捕虜となり富山の収容所で終戦を迎えた）（10・15）　15ページ

座談会「最先端研究どう伝えるSTAP報道の現場から」 3・12
林敦彦（朝日新聞社）／佐藤俊彰（読売新聞社）／鹿児島昌樹（日本経済新聞社）／砂沢融（TBSテレビ）／元村有希子（毎日新聞社）

クラブゲスト
西沢和彦・日本総研上席主任研究員／小幡績・慶応大ビジネススクール准教授／伊藤隆敏・政策研究大学院大教授 13
結城康博・淑徳大教授／大野恒太郎・検事総長／保阪正康・作家 14
枝野幸男・民主党幹事長／リーメスタ・ノルウェー大使／米国人元戦争捕虜 15
ダイブル・世界エイズ・結核・マラリア対策基金事務局長／スラーニ・パレスチナ人権活動家／マルグヴェラシヴィリ・グルジア大統領 16
ホーア・ロンドン五輪サイバーセキュリティ担当／馬渕清資・北里大教授（イグ・ノーベル賞受賞者）／シィ・国際赤十字・赤新月社連盟事務総長 17

記者ゼミ　ネット時代のマスメディア編
田中大雅・東洋経済新報社デジタルメディア局長兼デジタル戦略部長／鈴木祐司・次世代メディア研究所代表／八田真行・駿河台大専任講師 18・19

特別編　書いた話 書かなかった話「ベルリンの壁崩壊から25年」
あの夜、チャーリー検問所で
読売新聞社　森　千春 20
NHK　西川吉郎 21

ワーキングプレス 22
香港大規模デモ　人口700万人の「民意」とは　毎日新聞社　鈴木玲子

出雲発　高円宮典子さん結婚 23
「２千年」を超えた縁　県全体で見守り祝福
山陰中央新報社　斎藤　敦

被災地通信　陸前高田支局 24
待望の拠点再建で　一人一人の復興後押し　岩手日報社　斎藤　孟

リレーエッセー 25
私が会ったサマート・スマグーロフさん
NHK　石川一洋

試写会 26
イラク　チグリスに浮かぶ平和／無知の知

マイBOOKマイPR／寄贈書 27

理事会　会員増加に引き続き努力
上半期プレス会見109回

10月27日開催の理事会は、２０１４年度上半期の会員の入退会状況を検討し、法人会員・法人賛助会員の入会を増やすため理事会として取り組むことを昨年に続いて申し合わせた。

10月1日現在の法人会員は新聞・通信78社、放送59社の計１３７社。1年前に比べ11社が新たに入会した。法人会員数は２０００年（１５３社）をピークに減り続けてきたが、増加に転じ4年前の水準に戻ったことになる。昨年10月の理事会は会員増加に向けて働きかけを強めることで一致し、入会増につながった。

一方、10月の法人賛助会員は63社。昨年9月以降、新規入会は5社あったが退会もあり会員数は減少した。伊藤芳明理事長は理事会で「理事の協力で法人会員数は増えたが、まだ入会していない社もある。引き続き、理事会として入会促進に努めたい」と述べた。

理事会には14年度上半期の事業報告と収支決算も報告された。記者会見、昼食会などクラブ主催のプレス会見は１０９回で前年度同期より16回増えた。シリーズでとりあげたテーマは集団的自衛権、人口減少、野党再編、成長戦略など。「戦後70年語る・問う」も始めた。ハシナ・バングラデシュ首相ら訪日した首脳・閣僚やトルコなど新任の大使9人も招いた。若手記者が参加する記者ゼミは8回行い、三陸沿岸の被災地など現場取材団も4回、派遣した。

フィリピン取材団　大統領と会見

クラブの海外派遣取材団が11月3日、フィリピンを訪れ、4日、アキノ大統領と会見した。クラブ創立45周年記念事業の特別海外取材団の第1弾。14社29人が参加した。詳報は来月号の会報でお伝えする。海外取材団は次の訪問地を調整中だ。

『とっておきの話』発送

創立45周年事業の『とっておきの話』第七巻をクラブ会員と主な図書館、大学ジャーナリズム研究学科などに発送した。会報に掲載した「書いた話　書かなかった話」5年分などをまとめた。無料、３５００部。

産経記者の起訴に抗議声明

産経新聞の加藤達也・前ソウル支局長が韓国で起訴されたことに対し、日本記者クラブは10月9日、抗議声明を発表した。日本記者クラブが表現の自由の擁護につとめていることを説明した上で、今回の起訴が報道の自由と表現の自由を侵害し、自由な記者活動を脅かすものであると批判し、抗議を表明した。各理事に原案を送り了承を得た。クラブのウェブサイトに日本語と英語を掲載し、報道各社に発表文を送った。10月27日の理事会に先立ち、飯塚浩彦副理事長（産経新聞）は声明について謝意を述べた。

（専務理事　中井良則）

産経新聞前支局長の起訴について

日本記者クラブは、産経新聞のウェブサイトに掲載された記事についてソウル中央地方検察庁が筆者の加藤達也・産経新聞社前ソウル支局長を情報通信網法の名誉毀損罪で起訴したことに対し、抗議する。

報道の自由と表現の自由は民主主義社会にとって欠くことのできないものであり、国民の知る権利を守る重要なものである。報道機関と記者が集まる日本記者クラブは、記者会見の開催など国民の知る権利に資する活動を行い、表現の自由の擁護につとめている。今回の起訴は、報道の自由と表現の自由を侵害するものであり、自由な記者活動を脅かすものである。

座談会
「最先端研究どう伝える　STAP報道の現場から」

2014年９月10日

出席者

- 林　　敦彦　　朝日新聞大阪本社科学医療部デスク
- 佐藤　俊彰　　読売新聞東京本社科学部デスク
- 鹿児島昌樹　　日本経済新聞社科学技術部長
- 砂沢　　融　　ＴＢＳテレビ社会部科学担当デスク

（司会）

- 元村有希子　毎日新聞社デジタル報道センター編集委員

■今年1月、科学の常識を覆す「世紀の大発見」として、大々的に発表、報道されたＳＴＡＰ細胞。発表した理化学研究所（理研）の小保方晴子ユニットリーダーは、一夜にして時の人となり、「かっぽう着」や「リケジョ」が流行語になるほど、繰り返し報じられました。しかし、発表後まもなく、論文の内容に疑惑が浮上し、7月には論文が撤回されました。現在、小保方氏も参加して、細胞の検証実験が行われており、問題は尾を引いています。マスメディアは、最先端研究の動きをどう伝えてきたのか、科学報道の現場を語り合っていただきました。

生命科学の常識　覆すと判断

林

判断割れた初報の「一面トップ」

元村有希子（毎日新聞・司会）　まず、ＳＴＡＰ細胞の初報を取り上げたいと思います。

　1月30日の紙面です。各社それなりの扱いを多面展開でやったというところは共通していますが、一面の扱いは、朝日、毎日、読売が、トップ横凸版見出しで並んだのに対し、日経は、４段の活字見出しで2番手あるいは3番手の扱いでした。どういう判断でこの扱いにしたのか、お話しください。

　ちなみに、東京新聞は一面の下の方に囲み風で、産経新聞は、一面の左肩でした。

林敦彦（朝日新聞）　初報は主に大阪本社で取材、出稿しました。ｉＰＳに代表される万能細胞は、関西では普段から注目されるのですが、今回は「特別な万能細胞」のニュースであることや、再生医学の分野でも重要な発見であることから、論文をみんなで読み込み、生命科学の常識を覆す内容だと判断しました。

　それだけではなくて、信頼できる何人かの専門家の意見を聞いてみると、ほとんどが前向きな評価だったということも加味し、一面トップ級のニュースで差し支えないという判断をしました。

　ただ、東京の科学医療部の中では、初期の赤ちゃんマウスの話だということで、一面トップでなくてもよかったのではないかという議論が、当日のデスク会であったと聞いています。

佐藤俊彰（読売新聞）　科学に限らず、教科書が書きかわるような成果の時は、扱いが大きくなるというのが基本だと思います。そういう意味で、まず、ＳＴＡＰ細胞は、生命科学の教科書を書きかえる可能性が高いという判断がありました。

　あと、うちの新聞も「第３の万能細胞」という表現をしましたが、厳密にいうと、ＥＳ細胞やｉＰＳ細胞に比べ、さらに多能性が高い、本当の意味で万能細胞により近いという意味で、従来より進んだものではないかという判断もありました。この日、ほかのニュースにそれほど大きなものがなかったこともあって、あまり迷うことなく、一面トップの判

断になったと思います。

元村　朝日と読売が「第3の万能細胞」と見出しにとっていますが、毎日は「初の万能細胞」としました。iPSやESは胎盤にならない、つまり多能細胞である。今回のSTAPこそが万能だという意味で、「万能細胞、初作製」とやったのですが、見出しが結果的に他社と違っていて、指摘を受けました。

「まだマウス実験」扱い抑える

元村　日経は抑えた扱いになっていますが、どういう議論があったか教えてください。

鹿児島昌樹（日本経済新聞）　一面トップにしなかったのはマウスレベルの実験結果だったからです。どのぐらい紙面で扱うか評価する時は、うちの新聞の性格上、実用性とか実用化がどうなのかという点を重視します。

今回の件で言うと、患者さんの治療につながるのか、新しい薬あるいは画期的な治療法につながるのか。つながるのであれば、実現するのはどのぐらい先なのか。1年、2年？それとも10年、20年？　というところをまず考えます。

今回のケースは、マウスですね。マウスの細胞でSTAP細胞なるものができたとしても、ヒトの細胞でできるのか、わからない。ヒトの細胞でできなかったら、患者さんの治療には当然使えないわけです。

一方、これを一面に持ってくるかどうかについては、皆さんと同じような判断をしました。つまり、日本を代表する研究機関が発表した。中心的な人物は小保方晴子氏だという。この人は初めて聞く名前でしたが、論文の共同執筆者は、日本を代表する世界的な研究者たちが名前を連ねていました。

次に、第三者の専門家はどう判断しているか。万能細胞の第一人者というと、山中伸弥先生（京都大iPS細胞研究所長）ですよね。山中先生は、すぐにコメントを発表して、重要な成果だとおっしゃった。

あとはどこの雑誌に載るのか？世界的に有力な「Nature」だという。これらを勘案すると、大きく扱っていいのではないかと判断しました。

われわれは山中先生が2006年にiPS細胞をマウスの細胞で作ったと発表された時、掲載したのは社会面でした。翌年、ヒトの細胞でiPSができた時に、初めて一面に載せたのですが、その時も研究成果の意義は社内でもなかなか理解してもらえませんでした。あの時、デスクをやっていたのですが、記事の扱いを検討する編集会議で「この研究成果はどうなんだ」と問われて、「ノーベル賞級です」と言ったら、ようやく、一面に段物で載りました。

今回はどうかと考えた場合、いまは、万能細胞とか再生医療に対する読者の関心は非常に高まっており、マウスの実験成果でも一面に載せていいのではないか、ただ、一面トップではないと判断しました。

元村　もし、科学技術部が押していれば扱いは変わっていましたか？

鹿児島　ええ。記事の扱いを検討する編集会議で、本当に一面トップにしなくていいのか、と言われましたが、「一面のトップにはできません」と申し上げた。

初報については、もう1つポイントがあります。こういう可能性がある細胞ですと将来、治療に役立つかもしれない。

一方で、課題はいっぱいあります。まだヒトではできていないとか、そもそもちょっとした刺激を与えてできたというけれども、そのメカニズムがどうなのか、そこをしっかりと押さえていない。

初報から「課題多い」と指摘

鹿児島

課題がいっぱいある、と指摘する必要があるなと思って、三面に載せた記事は、そういう見出しを取りました。

元村　解説記事、「ヒト細胞での作製課題」ですね。

鹿児島　これを絶対に入れよう、おさえを利かせましょうということで紙面を作りました。

小保方さんについては、現場からは確かに、とても個性的な人だという連絡があったのですが、マウスのレベルなので、人となりは翌日以降でいいと判断し、社会面などには何も載せませんでした。

テレビ　映像そろい異例の大報道

元村　テレビの報道はどうだったのでしょうか？　NHKは科学報道をきめ細かくやっていますが、民放は、難しい話はあまり厚くやらないという意識があるようですね。

砂沢融（TBSテレビ）　STAP

細胞報道は、前の日に「解禁破り」があり、テレビ報道は前倒しになりました。

元村　解禁前に報道したのは、イギリスのメディアでしたね。

砂沢　そうですね。STAP細胞は、神戸の発表だったので、TBS本体ではなく、系列局が取材しました。TBSの翌日（解禁日）のデスクには、大きなニュースがあると、連絡があったようです。それが、前倒しになり、解禁が事実上解除になったのなら、ニュースとして放送しなければならないということになり、前夜、1月29日の「NEWS23」のトップの次の項目で放送しました。

「大発見」と報じた1月30日付の各紙朝刊

「NEWS23」の編集長によると、翌日が解禁日だったので準備不足ではあったものの、系列局の担当デスクと、前倒しでも、放送しなければいけないニュースだ、との意見で一致したということです。

その後は新聞各社の扱いの大きさもあり、翌日のニュースでは昼も夕方も夜もトップで扱いました。

テレビの特徴として、ニュースとして放送するにも、写真なり動画なり、映像がなければならない。逆に映像があれば、1分のニュースを、3分、5分、というように長いニュースにできることがあります。

今回のケースでは小保方さん本人のインタビューや研究室を解禁前に撮影することができていて、映像があったために、STAP細胞とは何か、という科学的な面以外に、小保方さんの映像を使えるということで報道は大きくなりました。

元村　「NEWS23」のトップ、あるいは2番手で報じるニュースというのは科学分野ではよくあるのでしょうか？

砂沢　少ないと思います。ただ、今回は発表当時、「すごい研究成果」を「若い女性」が成し遂げたと登場したことで、科学ニュースとは別の要素も持ったニュースになり、映像がそろっていたこともあって、テレビとして異例の大きな扱いになったことは言えると思います。

元村　1月30日、朝刊が出たその日の「朝ズバッ！」（TBS）に呼ばれました。私もうれしかったので、寝不足を我慢して出演したんですね。「これはすごい。iPSより簡単で、しかも安全性が高い」とか、「リケジョがノーベル賞をとったらどうしよう」など、非常に前向きな解説をしました。

本当に恥ずかしい限りですが、結果的に論文が7月に撤回され、不正が確定した形になっています。

その中で、内外からいろんな指摘を受けたり、反省したり、皆さんにもいろいろな思いがあると思います。いかがでしょうか？

際立った小保方氏のキャラクター

林　今回、通常の科学ニュースの報道と一番違っていたのは、小保方さんのキャラクターの強さをどう取り上げるかだったと思います。私は小保方さんの名前を初めて聞きましたから、まだ実績も評価されていない人をこんなに持ち上げていいのかと社内で議論しました。

結果的に、小保方さんの記事は、大阪版では一社トップになりましたが、当初は、総合面の「ひと」欄の扱いでいいのではないかと考えました。

「ひとこと」よりも成果の中身とかES細胞、iPSとの比較に焦点を当てたものを手厚くしようと考えていたのですが、事前レクチャーの時、実験室の映像を撮らせるとか、小保方さんの受け答え一つ一つがものすごく面白く、興味深いという報告がありました。

専門の記者を含めて4人みんなが興奮して帰ってきて、「あの笹井（芳樹・理研CDB副センター長）さん、あの若山（照彦・山梨大教授）さんがここまで言っている」と、すごい高揚感のようなものがありました。

私自身は、「そうなんですか？」と非常に冷めていたのですが、それでも、他社との競争の中で、キャラクターも含めてきちんと伝え切らなければいけないということで、人となりに焦点を当てたものもつくったということがありました。

山中さんの時もマラソンとかいろいろキャラクターの報道がありまし

たけれども、小保方さんも、ある面ではスターのような印象やハーバード大であるとか早稲田大の出身とか、そういうネームバリューもあると。社会現象として大きなニュース性があるのだから、それを取り上げるのはメディアの性格上、当然だという判断も当初はありました。

ただ、最初に報道した後は、そのあたりは極力抑えるようにしました。

話題性あった「リケジョ」

元村　読売は、初報の日に、「リケジョ」を見出しにとって、社会面トップで軟派記事を掲載しました。

佐藤　初報の時は医学担当デスクではなかったのですが、たまたまその日は当番デスクでした。

今回、研究が面白いし、非常に興味深いものだったからこそ一面で大きく扱ったわけですが、それに加え、小保方さんはいままでにない、いろいろな意味で話題性がある人だったので、一体どんな人なのかという関心にこたえる意味で、当初、こういう形で取り上げたこと自体は、妥当だったと思っています。

ただ、あの時、直接の担当ではなかったからこそ感じたのかもしれませんが、話があまりにも調和して、言ってみれば「メディアが食いつきそうな、ちょっと出来過ぎた話」という違和感がどことなくありました。ただ、「Nature」に載り、理研のトップクラスの研究者がきちんとオーソライズをしているという時に、それ以上疑う根拠もなかったので、その違和感に、それ以上、注意を払うことはありませんでした。

反省を感じるのは、その後の報道です。小保方さんのキャラクターやリケジョということに過度に焦点を当てたような報道がなかったか。われわれもあらためて考えなければいけないと思っています。

「出来過ぎた話」と違和感あったが

佐藤

元村　毎日も同じような判断でしたが、30歳で「Nature」論文の筆頭著者というのは、男であれ女であれ、とてもすごいことですし、おばあちゃんから譲られたかっぽう着を着て実験していると言われたら、メディアとしてはぐらっときます。

私自身は、女性が科学の世界にもっと入ってほしいという気持ちもあったし、彼女にフォーカスした記事、続報を出すということは当初、全然不自然ではなかったですね。その後、変化するわけですが。

テレビは、小保方さんをどう伝えましたか？　科学のワイドショー化を象徴する出来事だったと言われていますが。

砂沢　テレビの場合、科学系のニュースに限らず、どんな映像を使って放送するのかは常に考えなければいけないことです。

動かない写真よりも動く動画の方が良いし、動画でも、研究室で座っているだけよりも、実験をしている研究者の映像の方が良い、ということになります。

そういう観点からすると、小保方さんのケースでは、解禁前に実験の様子を撮影でき、本人の受け答えも面白い。面白いというのは「細胞生物学の歴史を愚弄している、と言われた」といった発言ですが、「音」、つまり本人の発言として使えるものも豊富だったことで、格好の、やらない手はないくらいのニュースでしたね。

いまは情報番組と言いますが、ワイドショーが大きく扱ったのもそういう理由があったのだと思います。その後一転して、疑惑が大きく取り沙汰されてからは、さらにその傾向が強まったと思いますが、情報番組にとっては「科学系」のニュースではなく、情報番組が伝統的に好んできた「話題の人物をめぐるニュース」だったのだと思います。

元村　後になって、「かっぽう着の写真をなぜ載せるのか」という批判をもらったのですが、２００２年に島津製作所の田中耕一さんがノーベル化学賞に選ばれた時に、記者会見に作業服で登場して、その写真とともに「博士号を持っていないエンジニア、主任さん」という見出しで各社が大きく報じました。それと何が違うのかなと思いました。

対象が女性だから批判されるのかと、逆に、違和感を覚えたりもしました。

不正疑惑　ネットが発端

元村　また「持ち上げておいて、不正がわかったら一斉にたたくのはどうか」という意見ももらったのです

が、皆さん、それぞれ、いつ頃から報道のトーンが変わりましたか？

林　そこは、ネット上での指摘の問題と絡むと思います。

いまの若い記者はネットを見るのが日課ですから、当初からいろんな情報が上がってきました。特に画像の問題などで、疑問が相次ぐ中、そんなことはないだろうと思いつつも、「確認して」という指示を出し、いろんな確認作業をした上で、とにかく理研の本部に見解を聞かなきゃ駄目だということになり、2月中旬に、質問状を送りました。

すぐに「そんなことはありません」という反応が来ると思ったら、何の反応もなく、これはきちんと調べないと駄目だというモードになりました。

もちろん、ネットで疑問が出た時点で、理研の幹部にも当たっているのですが、打ち消す材料にはならなかったということもあり、この「世紀の大発見」は本当にそうなのか、しっかり調べようという取材がそのあたりから本格化したと思います。

元村　皆さん、疑問を抱くのは、やはり2月中旬ぐらいからですか？

佐藤　論文が出てから1週間ぐらいでしょうか、ネットで最初の疑問が出始めた。もちろん、気にはなりました。しかし、匿名の書き込みは扱いが難しい。

匿名で書き込むというのは、ある種、自分を安全なところに置いて書くわけですから、誹謗中傷も含めて何でもできてしまう。それをどこまで疑って調べるかということになりますが、理研のトップクラスの人たちが、あれだけ自信を持って説明したのだから、最初は、ネットに書き込まれたことは、どちらかというと、怪文書の類いではないかという印象があった。すぐには、報道には、踏み切れませんでした。

転機になった若山教授の会見

そういう中で、各紙、大きくモードが切りかわったのは、若山さんが会見で論文の撤回を呼びかけたところからですね。うちも、若山さんが呼びかけるということの重大性が、見方が切りかわった一番のタイミング、転機だったと思います。

元村　3月10日、若山さんが山梨で会見をするとなった時に、ついに著者の中から造反が出たかと、衝撃を受けました。

鹿児島　われわれも、ネットでどうも変な指摘があることは認識していました。ただ、ネットの情報は玉石混交ですから、うのみにするわけにはいかない。理研がどう考えているのか、どう動くのかを取材して、2月18日に、理研が調査を始めたことを載せました。

ただ、その段階ではSTAP細胞を否定するわけではない、指摘があって、不自然な点があるから調査を始めたという話だったと思います。

だから、発表した当事者が動き出したということが1点と、若山先生が会見した時は、びっくりしましたが、そこから本腰を入れて、記者を山梨などに何回も行かせるようにしました。

先ほど上げて落とすとおっしゃいましたが、われわれとしては、そういう意識は全くありません。淡々とやっているつもりで、どういう良い点があるのか、一方で課題は何なのかをバランスよく載せることに努めています。

STAP細胞の発表があったのは事実なわけで、それをどういうふうに扱うかは、われわれのニュースバリューの判断ですけれども、報道したこと自体、間違っているとは思っていません。

科学のワイドショー化を象徴

元村

その後、発表が実は間違っていました、おかしいかもしれないと言い出したら、それはそれで事実だから、それも淡々と載せていく。また、そのインパクトが社会現象としてだんだん大きくなってきたら、それに応じて記事を書いていくというのは、新聞社、報道機関として当然のことだと思います。

元村　ところで、最初の成果発表から、3月14日の中間報告、4月1日の最終報告、その後も含めて、理研の対応について、お聞きしたいと思います。

課題残る理研の対応

林　大阪からすると、途中で理研の広報の態勢が切りかわったように感じました。

当初は、神戸にある発生・再生科学総合研究センター（理研CDB）といういわゆる子会社的な所での対応がすべてでした。それが、うちも2月半ばに画像が不自然だとか、3つの疑問といった記事を書く中で、質問をしても、答えられない、理研本部に聞いてくれというふうになっ

た。そこからは、ものすごく対応が遅くなりました。

大阪は東京と連携して取材していますが、どちらで裏をとるかといった時に、それまではほとんど理研CDBで済んでいた話が、そうならなくなっていった。

しかも、理研本部の広報に取材しても、「そこはまだ調査中」とか、歯切れが悪くなり、表の取材だけではなくて、いろんな関係者に当たっていく作業をしないと、真相に迫れなくなったという局面になったと思います。

元村　砂沢さんは、東京で、理研とのやりとりを結構なさった？

砂沢　そうですね、広報とは何度もやりとりをしました。文科省クラブ所属の記者の中には、何で神戸が対応しないのだろう、これは神戸マターでしょう？　という声も上がっていたのですが、その理由が本部の広報の対応でした。神戸で進んでいる事態を把握できていないことがとても多かった。理研は大きすぎる組織を広報が把握しきれていないという印象でしたね。

薄かった　本部の当事者意識

元村　私は、理研の本部の当事者意識の薄さを感じざるを得ませんでしたね。

鹿児島　研究者の皆さんは、いわば個人商店で、特に理研は研究者が自由にできる。それで伝統的にいい研究成果を出してきたということがあって、それがそのまま続いているのだろうなと思います。

CDBは神戸にありますが、理研の主力は埼玉県和光市（理研本部）とか横浜ですね。CDBには、京大をはじめとして、関西の先生たちが結構多い。そこと和光の人たちとの接点があるかというと、なかなかなかったのではないですか。

確かに野依先生（良治・理研理事長）がトップにいるけれども、どうぞご自由に、というイメージでやっていらっしゃるのだろうと思うんですね。それがいままではよかったのですが、こういう状況に陥った時は組織としての体をなしていないというのでしょうか、ちょっと理解に苦しむところがあるという気がします。

佐藤　最初、STAP細胞の発表があって、2月の半ば過ぎぐらいまでは、うちも大阪の科学部が主体で、東京はお手伝いをする形でした。理研の本部が調査を始めたあたりから、東京としては本格的に取材にかかるという状況でした。

いまも「細胞あってほしい」の声

砂沢

一貫して感じたのは、理研本部の危機感の小さいことです。組織として何が求められていて、何をすれば信頼回復につながるのかという点で、全くピントが合っていなかった。

たとえば、STAP細胞を、理研の名前で華々しく打ち出しておきながら、いざ、話が不利にというか、形勢が悪くなると、それは組織の問題ではなくて研究者個々の問題だからと説明し、幹部は発表の時まで出てこない、何も語らないという状況が続きました。

問われる研究不正　ずれる焦点

元村　科学報道の本質が見えなくなっていく焦りを私は感じています。本当は研究不正がなぜ起きたのかということが、一番問われなければいけないのに、小保方さんだけが悪いのかとか、STAP細胞はあるのかとか、話題がずれていく。あるいは理研はけしからん、みたいなガバナンスの問題にぶれていく。それは、科学報道が本来目指すべきところとはだいぶ違っていると思います。

林　STAP細胞があるのかないのかという問題と、この論文に不正があるのかないのかというところを、両方きちんと検証し、追究していかなければいけないという意識でやってきました。

しかし、問題が拡散しメディアの取材合戦になっていったことから、どこに焦点を当てるのか、問題がみえにくくなった気はします。

砂沢　STAP細胞問題ではいろんな疑義が出てくるのですが、個別の疑義について、テレビのニュースとしては非常に扱いづらい。マウスが違うとか染色体が違うとか、テレビが扱うニュースの並びで見ると細か過ぎる話なんです。

だけど、取材合戦になって、新聞が独自ネタとしてそれなりの扱いで紙面化してくると、われわれも何もやらないわけにはいかない。

そんな中で、いろんな人に聞くと、STAP細胞があってほしいという人はいまだにいる。この問題を取材している科学系の記者はもはや「ない」と、早くから思って

いるのですが、そうでない人の多くは「本当にＳＴＡＰ細胞はないの？」と言っている。

この間、内閣改造がありましたが、代わった薬学博士の文部科学副大臣が、ＳＴＡＰ細胞について「私は正直あってほしいと思います」と発言しました。

そういう期待が世の中、さらには番組の担当者の中にもあることが、テレビでも、このニュースを何らかの形で出し続けた背景にあったのだと思います。

この問題をどう報じるかは、なかなか難しいなと感じますね。

佐藤　4月に最終報告を理研が出した時点では、論文は駄目だけれども、ＳＴＡＰ細胞の存在自体を否定する強い材料が出たわけではありませんでした。世間の関心がＳＴＡＰがあるのかないのかに向けられるのは、避けられなかった。理研が一定の答えを出せると言うならば、それを待つというのも、この時点では必要なことだったと思います。

ただ、その後、5月、6月と時間を経ていく中で、この論文の根幹を否定するような材料がだんだん積み重なってきましたよね。その末に結局、7月に2本の論文が撤回されました。

「ない細胞」の再現実験は無意味

こうした経緯を踏まえると、7月に撤回された時点で、この論文は完全にアウトになった。科学の世界では、アウトになってしまったものについて、もう1回再現をするとか検証するというのは、そもそもナンセンスな議論です。

約1万5000人の基礎生物学者を抱える日本分子生物学会からも、理研の対応は科学を否定するものとの強い批判が出ました。

理研がそういう現象がまだあるかもしれないと本当に信じているならば、「再現」や「検証」という名前ではなくて、別枠で研究予算をとって、新しい研究としてやるべきでしょう。

元村　論文が撤回されたのですから、ＳＴＡＰ細胞はないわけです。あってほしいという路線が、なぜそのまま生き残るのでしょうか。「再現実験をする意味はない」と社説で書いたりしていますか？

佐藤　読売新聞は書きました。検証実験の中間報告の後、社説で、こうなってもなお、検証実験を続ける意味があるのか、といった指摘をしています。

林　みんなが真相を突き止めて「ない」という認定をしたいのだけれども、それだけの根拠は理研も示せていない。理研は11月とか節目を切っていますが、どのタイミングで報道をいったん終わらせるのかという判断は難しいと思います。

元村　科学というのは、論文がいくら有名な雑誌に載っても、載った段階では仮説であるということを私たちは自明のこととして記事を書いていますが、こんなふうに報じられたら、本当だと思う人が大半だと思うのです。

科学報道について、私たちが持っている常識と世間の受け止め方というのはかなり乖離があると思います。そこを踏まえて、書き方をこんなふうに気をつけているとか、扱いで気をつけている事はありますか？

鹿児島　科学の報道に限らずだと思うのですが、少なくとも3つ大事なことがあると思っています。

まず、いかに早く報道するか。速報性というか迅速性。それから、いかに的確、正確に評価するか。もう1つは、いかにわかりやすく説明するかです。

一番大事なものは　信憑性の確認

鹿児島

3つを満たせれば一番いいんだけれども、それはいろいろな制約があってなかなかできません。そうすると、優先順位をつけなければいけないのですが、その中でいま、一番大事なものはというと、やはり正確性だと思うんです。これ、本当なのかな、信憑性はどうなのか、と確認や裏づけ取材をまずはしっかりやるしかないですね。

ただ、今回の件もそうですが、発表だ、あと何日後には解禁だ、という中で、それまでにどれだけ詰められるか。限界はあるけれども、やらなければいけない。

科学の報道は100パーセント完璧なものではない、と思う読者が増えてきているのかもしれないし、報道に対する不信につながるのかもしれません。そうした中で、現時点ではこうですよ、ファクトとしてこういう発表をしています、また、こういう可能性もある、一方でこういう課題はあるという事がわかるように、何度も何度も記事にするしかないと思いますね。

佐藤　「正確に」というのは、その通りだと思うんですね。一方で、中

これからも　だまされるリスクある

元村

途半端な扱いの記事というのは、読者に意味、あるいは意義がきちんと伝わるかという点が難しい。

われわれの世界では、判断に悩んだ時に、大きくもなく、小さくもなくという程度で、取りあえず載せておこうということがあります。しかし、こうした「行間の悩み」はなかなか伝えにくい。

記事にメリハリ　傾向強まる

だからこそ、逆に本当に必要だと思えば大きく扱うし、そうでなければ潔く載せないという判断もあり得ると思います。

最近は、どちらかと言えば、メリハリをはっきりさせるこうした傾向が強くなっています。今回の報道にも、そうした側面はありました。

政治、経済、社会、いろんな記事と一緒で、科学記事も状況が変われば内容が変わるということ、後で違ったということがわかることもあり得ますということを、伝えていくしかないという気がします。

林　限られた時間の中でいかに判断するかといった時に、記者自身、デスクも含めて、専門性をさらに高めていく必要があると思います。

科学報道に限らず、報道機関には人も時間もかけて真実を検証しなければいけないという、大事な役割があると思っています。関係者への取材を通して、これが本当なのかと見極める力、それが科学ジャーナリズムの本質だと思うのですが、そういうところを高めていかないといけないんじゃないでしょうか。

再生医療　高まる関心

STAP細胞の報道では、臨床応用的な面で見出しを取り過ぎだという指摘がある一方で、それがないとニュースは伝わらないという意見もありました。そこをより正確に、見出しにプラスとマイナスの側面を両方出していくという工夫が、大きなニュースの場合は必要なのではないかと思いました。

一方で、見出しが1本しか立たない場合、その見出しにどういうニュアンスを込めるのか。たとえば「か」を入れるだけでも印象が違うし、科学報道に限らず、こういう条件の場合はこうなんだと、きちんと伝えていかないといけない。

科学報道に対する読者の関心は、いま、特に再生医療の分野で高まっています。そういう中で、読者の求めに応えていくことが必要だと思います。

「検証」「総括」どう進める

元村　科学報道はこれからもだまされるリスクがあります。成果が正しいかどうかを見極めるまで待っていたら、多分2年、3年かかるので、それはやはり知った時点で報じないといけない。その過程でいくら正確さを追求しても、今回のように全てのメディアが結果的にだまされることもある。

今回も1月30日の段階では捏造を見抜けなかったわけです。それでもなおかつ報じなければいけないという前提で、私たちは何に気をつけるべきか。また、今回のSTAP報道の検証なり総括というのは必要だと思いますか？

砂沢　「検証」なり「総括」というのは、「当初はだまされてしまった」ことを訂正すべきかどうか、ということだと思うのですが、それは必要ないと個人的には思っています。

テレビも「世紀の大発見」を、発表直後、確かに大きく扱いましたが、「一転して疑義が続々」という流れになってから、このニュースの扱いは、さらに大きくなったと思っています。

また、その後の放送で何が問題だったか、ということは十分伝えてきたと思っているからです。

鹿児島　日経新聞は、問題になっている「リケジョ」とか、「かっぽう着」とか、そういう形の報道はしていません。

STAP細胞の発表があった後、さまざまな疑義が出て、論文を撤回するの、しないのとか、STAPが作製できているのか、いないのかとか、1月の理研の発表をゆるがすようなところは追いかけてきましたが、現時点で個人的には、今回の報道を検証する必要性があるとか、あるいは訂正を出す必要性というものは感じていないですね。

誤報や虚報とは性質が違う

佐藤　報道そのものに訂正が必要かとか、検証が必要かというと、私個人としては必要がないだろうと思っています。

なぜかというと、誤報や虚報とい

うのとは性質が違うからです。最初から怪しい部分があったのに、それを詰めなかったとか、あるいは、小保方さん1人の主張に寄りかかったかというと、決して、そういう話ではない。

理研のしかるべき人たちが当初、それ以上確認の取りようがないレベルで、お墨付きを与えていました。それさえ最初から疑うとなるとわれわれは、そもそも何を根拠に判断するのかということになる。

今後、第三者の意見を聞く、あるいはそのオーソライズは本当に大丈夫なのかという確認は、より慎重に行うことになると思います。でも、しっかりした科学誌に載り、しっかりした人たちが見て「大丈夫ですよ」と言えば、それで書くという線引きの判断は、基本的には変わらない。

ただ、現在進行形のこの問題が決着するのが、11月なのか、あるいは来年の3月なのかわかりませんが、一体この問題は何だったんだろうと振り返る機会は、私たち自身にとっても、読者にとっても、いずれ必要かなと思っています。

林　報道の検証とこの問題の検証では意味合いが違うと思います。STAP細胞問題の検証という意味で言うと、朝日新聞は東京の科学医療部長の名前でこの問題をきちっと検証していきますという記事を出しています。検証するというのは、細胞の有無、あるいは論文に不正がどうあったのかという点について検証していきますという意味でした。

その時も社内的な議論があったのですが、報道自体の訂正、取り消しということはなじまないと、最終的には意見が一致しました。

それは、最初に報道した時に、間違いだということを知り得ていた、ということではないし、不正認定が決まってからもそれを初報と同じとはいきませんが、大きな扱いで報道して、読者には届けていると思うからです。

問題の検証については、誰がどのように不正をしたかというところはまだ最終的に明らかになっていないので、その検証は続きます。

一方で、報道自体の検証はというと、これは個人の意見ですけれども、結果的に読者を混乱させたという点で、報道に責任の一端があることを検証していく必要があるなら、たとえば朝日新聞で言えば、「メディア」欄の担当者がわれわれに取材をして、読者に紹介するという方法はあると思います。

科学分野でも　ネットに存在感

元村　今回のSTAP細胞問題を含め、科学の分野でもネットの存在感が増してきたように思います。

佐藤　ネットにいろんな情報があり、それを手がかりやきっかけにして取材が広がっていく機会がいま、多いですから、そういう意味では、ネットのチェックはこれまで以上に密になっています。

先ほど、匿名というのは無責任なことも書けるから判断が難しいという話をしましたが、判断の難しいものの中から、これは、というものを見つけ、掘り出していくのも記者の能力、見識だと思います。

昔は匿名の手紙、投書で来ていたのが、いまはネットに変わったという見方もできるわけで、そういう意味では、目利きができるような記者を育てながら、ネットをうまく活用していくというのがこれからの流れだと思います。

元村　野方図に悪口を書くというネットもあれば、専門家の人たちがそれなりに検証して発信するものもあります。また、SNSなどでは、プロの人が自分で発信しています。そこでは、マスメディアが要らないぐらいの専門的な議論が普通になされていて、21世紀型だな、と感じます。

玉石混交を承知でネットの動向を参考にしていく必要があると、今回あらためて痛感しました。

記事が研究費獲得の材料に

元村　誰も知らないから新しく、誰も成功したことがないから画期的なわけで、それを私たちが報じることで、結果的に不正の片棒を担ぐというリスクは十分にあることを、今回感じました。それに対して、どう対応したらいいのでしょうか？

また、今回の問題でも指摘されましたが、新聞記事が研究費獲得の材料として使われることも増えていますよね。

林　たとえば、医療政策をめぐる政府の取り組みをいち早く報じた内容を受け、経産省や厚労省が予算獲得に向け、財務省をある面では説得するような記事、報道があるのは確かです。

STAP問題で萎縮してはいけない

林

われわれとしては、「それは本当にニュースなのか」という点を突き詰めていくしかないと思います。

今回、これまでとは明らかに違うなと思うのは、科学的知識や科学ニュースが社会にインパクトを与える割合が昔よりも高くなっているという点です。

であれば、それをほかのメディアよりも先んじて丁寧に、しかも正確に報道していくということは必要だし、同時に、今回のSTAP論文の問題で萎縮してはいけないなということは強く思いますね。

佐藤　今回、われわれが得た教訓は何だったのだろうという話を社内でしました。

1つは、バイアスがわれわれの中にかかっていなかったか。しっかりした人たちがオーソライズをしてくれることは絶対に必要なのですが、一方で、オーソライズされたことでバイアスがかかってしまって、不正があるかもしれないということに対して、感度が鈍くなっていなかったかと問われれば、正直言うと反省はあります。

科学記事は、研究者の予算獲得のために利用されることがあるという話がありました。記者の側にも、科学に関する専門性が高くなると、つい研究者の考え方に同調してしまい、批判的に研究者あるいは研究を見るという部分が弱くなりかねないというジレンマがあります。

われわれはサイエンスライターとかインタープリターとか言われることが多いのですが、そうである前に

各紙の初報を見ながら語り合う（9階貴賓室）

「批判的な目」の大切さ　再確認

佐藤

テレビも　専門記者育てねば

砂沢

新聞記者として、社会に対してどういう意味を持つのか、そこに批判すべきことはないのか、バイアス、先入観を除いた上で、常に「批判的な目」で考えてみるという基本の大切さを再確認させられました。

鹿児島　できることは限られると思います。1つは、一生懸命、先端の研究なり技術の現状を取材して知識を蓄える。それから、どこにどういう研究者がいて、その人はどういうことを考えて、何をやっているのかを知るということが、セーフティーネットではないですが、大事だと思います。

「あの研究者の言っていることは眉唾だから」というようなことをおっしゃってくださる研究者もいるわけで、そういうところが一番大事なのではないかと思うんですね。

砂沢　世の中の人に、科学の世界ってこういうことなんだとか、良くも悪くもこの騒動で伝えることが、意図せずできたのではないかと思っています。

あとは、ずっと課題なのですが、今回あらためて、テレビ局としても専門記者を育てていかなければと痛感しています。育てる仕組みというのはないのですが、たとえば私みたいな、たまたま科学担当として育った人間が、意識を持ってやっていかないといけない。

民放には科学部がない。社会部の中に科学担当を置いているので、なかなか難しいところはあるのですが、STAP細胞問題を契機に、そういう意識が多分、局内にも広がったと思います。

最大限の注意払い　伝え続ける

元村　科学研究と科学報道は「科学」を共通項としながらも、持っている時計が違うのだと、今回の件であらためて実感しました。

「速く伝える」という記者の使命は、過ちのリスクと背中合わせですが、科学技術が社会への影響力を強めているいまだからこそ、最大限の注意を払いつつ、伝え続けるしかありません。そんな悩みも共有し、思いを新たにしました。

ありがとうございました。

（整理まとめ　会報委員　荒田茂夫）

「ツケを後回しにするな」西沢氏
「配分見直し議論は筋違い」小幡氏

西沢　和彦　日本総研上席主任研究員

9・26（金）研究会「130兆円は誰のものか―年金運用改革を問う」①／司会：竹田忠委員／出席：61人／動画／会見詳録

小幡　績　慶応大学ビジネススクール准教授

9・30（火）同研究会②／司会：竹田忠委員／出席：60人／動画

公的年金の積立金130兆円。この巨額マネーを運用しているのが世界最大級の機関投資家・年金積立金管理運用独立行政法人（GPIF）。安全第一で国債中心の運用をしてきたが、安倍政権の成長戦略の一環として、株式への積極投資へと大きくかじを切ることになった。市場には、PKO（株価対策）としての期待も高まり、うまくいけば高いリターンが得られるが、損失が出れば、将来の年金が減ることに。

第1回のゲストの西沢さんは、政権サイドが、他の先進国ではもっと株で運用していると主張していることに反論。日本とは決定的に異なる点があると指摘した。それは、比較されているカナダやスウェーデンが株で運用しているのは、公的年金のうち、上乗せの2階部分のみ。最低保障や基礎年金としての役割を持つ1階部分は、運用損の影響は受けない。それに対し、日本は、株の損失が、1階部分の基礎年金にも影響を及ぼしてしまう。なぜか？

年金運用改革

それは日本の基礎年金が制度として曖昧なため。基礎年金は本来何を守るのか？どういう水準をカバーするのかという、年金制度そのものの課題を議論する必要があると警鐘を鳴らす。その上で、損失が出た場合、将来世代にツケを回すのではなく、いまの高齢者から年金を抑制するなどして、いまの世代のうちに損失を処理する覚悟が必要と主張した。

2回目のゲストの小幡さんは、自らを「反アベノミクスで最も有名になった男」と紹介して会場の笑いをとりながら「年金の運用配分見直しを議論していることは、筋違い」といきなり一刀両断。

まず必要なのは、いまの低リスク運用から、どれくらいリスクを上げるのか、という大前提の判断を、130兆円のオーナーである国民に問わなければならない。そこで、もっとリスクを上げてもいいということになれば、後は、運用のプロに任せればいい。

国内株を何％まで増やすのか、などということも、外から決めることではない。なぜなら、これから株を買い増しします、などという表明は、市場に手の内を見せることであり、先回りされて株価をつり上げられるだけだ。黙ってやるべきだと。この春までGPIFの運用委員を務めた経験から、マーケットの実態を踏まえた話を展開、会場の注目を集めた。

お二人の意見が共通していたのは、年金運用改革は成長戦略ではない、ということ。

年金に安全を求める国民感情と、巨額マネーを経済成長に役立てたいという政権の思惑とのギャップは大きい。企画委員　NHK解説委員　竹田　忠

伊藤　隆敏　政策研究大学院大学教授

GPIFの運用が世代間対立を和らげる

10・21（火）研究会「130兆円は誰のものか―年金運用改革を問う」③／司会：竹田忠委員／出席：69人／動画

伊藤教授は、公的年金の運用を担う年金積立金管理運用独立行政法人（GPIF）に対し、現在の資産配分（ポートフォリオ）を見直して、60％を占める国債の比率を引き下げることや、理事長1人に権限が集中する体制を複数の理事による合議制に改めることを求めた。

伊藤教授は1年前に、有識者会議の座長として公的年金や独立行政法人の運用改善に関する報告書をまとめた。その柱がGPIFの運用改革とガバナンス改革で、この日の会見もその内容に沿ったものとなった。

年金は、高齢化と現役世代の減少により、後の世代ほど金額が減るという厳しい現実がある。伊藤教授は、GPIFが後の世代ほど不利になる状態を和らげる役割、つまり「深刻な世代間対立を和らげる緩衝材」の役割を果たすと主張する。

緩衝材になれるかどうかは、運用の結果次第。世の中の注目を集める新たなポートフォリオは、会見が開かれた10月21日の時点では公表されていない。この会報が刷り上がったときには、明らかになっているだろうか。ガバナンス改革に必要な法改正の作業は、これから本格化する。

朝日新聞論説委員　友野　賀世

結城　康博　淑徳大学教授

高齢者の中で生まれる「格差」年金減額で所得再分配も

10・1（水）研究会「現代日本の貧困」④／司会：軽部謙介委員／出席：52人／動画

3000万人を超える高齢世代の貧困はどのような実態なのか。

4分の1は年150万円以下で暮らし、19%は貯蓄が300万円に届かない。セーフティーネットとしての生活保護も高齢者の受給申請が増えているが、体力の衰えから就労支援が困難だ。また保護申請を受け付ける自治体の福祉現場が劣化しているという「古くて新しい問題」も解決していない。

一方で500万円以上の所得を得ている65歳以上も12%に達し、2000万円以上を蓄えている人も約2割いる。

最近は、子育て世代に比べ高齢者が優遇されているという議論が目立つ。しかし、ケアマネージャーとして福祉の現場に身を置いていた経験から、こういう二項対立的な捉え方は現実の正確な把握にはつながらないと警告する。

「一口に高齢者というが、その中で格差が生まれており、ひとくくりの議論はできない」

所得の高い階層から年金減額などの手法を通じて高齢者間の所得再分配を行うことも、解決策の1つと提言していた。

企画委員　時事通信解説委員長　軽部　謙介

大野　恒太郎　検事総長

「格好悪いことを気にしない」未来志向の検察改革を語ったが…

10・3（金）昼食会／司会：瀬口晴義委員／出席：54人／動画

とにかくいろいろあったけれど、検察はもう吹っ切りましたから――。そんな雰囲気が伝わってくる昼食会だった。

大野氏はかんで含めるように、「未来志向の検察改革」を語った。その原点に掲げた「公平誠実」な人柄がうかがえるようだ。だが話の所々で、違和感も覚える。検察の目で整理し直した、新たな公式見解を聞いている気がするからである。

たとえば、取り調べ中心の捜査が立ち行かなくなった理由を、容疑者や弁護士、裁判所などの外部要因にだけ求めているように感じる。可視化への積極対応の方針はもっともとして、録音・録画の弊害を訴えていたはずの一線の検事たちの憤りはどう解決されたのだろうか。検察制度や組織の「疲労」に踏み込んだ話も聞きたかった。

大阪地検特捜部による証拠品の改ざんが発覚してから4年。法制審議会の議論も乗り切り、新たな一歩を踏み出す思いであろう。新時代に対応する検察のあり方を模索する中では、「格好悪いことも出てくる。それを気にしない」と述べた。この言葉の通りの、成功体験にとらわれない、国民目線に立った改革の徹底を期待したい。

日本経済新聞編集委員兼論説委員　坂口　祐一

保阪　正康　作家

教訓を継承する踏み台に総括されていない「戦後70年」を考える

10・7（火）シリーズ企画「戦後70年　語る・問う」②／司会：川村晃司委員／出席：113人／動画／会見詳録

「戦後70年」の取材をしていると、「時間の壁」に圧倒される。終戦時、20歳だった人が90歳。戦争体験を語れる人はどんどん減っており、生の証言を集めるのは本当に骨が折れる。

さらに難しいのは、あの戦争とそれに続く時代を、冷戦すら知らない若い世代にどう伝えたらいいのかという問題である。ヒントを求めて、保阪正康さんの話に耳を傾けた。

「日露戦争から70年なんて誰も言いませんよね。満州事変から数えれば14年続いたあの戦争から70年たったいまも『戦後』として総括されていないから、『戦後70年』と言うんです。この70年は何だったのか考えないのは、歴史に対して不謹慎」。戦争当時、前線にいた兵士ら延べ4千人を超える人から取材し、数え切れない一次史料を確認、昭和史に真摯に向き合ってきた保阪さんの言葉は重い。

次世代に伝えていくべき「3つの教訓」として挙げた中で、「日本はルール無視の戦争をした」という点が印象に残った。「第1次大戦の反省から定まった捕虜の扱いなどのルールを無視したことは20世紀最大の恥ずかしさです。教訓を継承する踏み台になるのが戦後70年の役割でしょう」

共同通信編集局企画委員　沢井　俊光

枝野（えだの）　幸男（ゆきお）　民主党幹事長

有権者の視線に変化
野党再編は共闘の場を増やすことから

10・10（金）記者会見／司会：倉重篤郎委員／出席：62人／動画

民主党の支持率は一向に上がらないものの、小さな変化が起こり始めている、という。

1つは、有権者の民主党を見る目である。少なくともこの1年9カ月、真面目に街頭演説に取り組んできた者に対しては視線が和らいできた。

2つ目に、アベノミクスへの期待度はまだあるものの、中小零細業者の間には思惑と異なり自分たちにあまり恩恵がきそうもない、という雰囲気が出てきた。今回、幹事長を引き受けたのも、そういった変化の兆しを感じ取っていたからだ。

今後の野党再編については、ベストよりベターの選択だとして、まずは野党として最も重要な国会審議の場で少しでも共闘できる場を増やし、その積み重ねで距離を縮める考えを示した。何よりも民主党がどういう方向に進んでいくのか。その発信役としての責務を果たしたい、と強調した。

尊敬する政治家として台湾の李登輝氏を挙げ、「政治とは時間の関数である」という同氏から直接聞いた、とする至言を紹介、日本の政治家としては鈴木貫太郎の名を挙げ、行き詰まった近代化の敗戦処理を自らも担いたい、と語った。

企画委員　毎日新聞専門編集委員　倉重　篤郎

アーリン・リーメスタ　駐日ノルウェー大使

「漁業、発電、北極で協力し合おう」

10・14（火）記者会見／司会：杉田弘毅委員／通訳：西村好美／出席：35人／動画

「ノルウェーと日本が協力できる国際的なテーマは海洋、エネルギー、北極の3つだ。これは気候変動や天然資源の持続的な管理という人類が直面する課題に関連している」―。このほど着任したリーメスタ大使は会見で、こう切り出した。

漁業資源の減少が世界的な問題となる中、持続可能な漁業資源の管理に成功した政策は国際的に注目されているし、来年末の合意を目指して進む新たな国際的な地球温暖化枠組みづくりの交渉の中でも、独自の存在感を示しているノルウェー。大使の言葉の端々に、多くの国際的な諸課題の解決に貢献してきたという自信のほどが感じられた。

北海の石油や天然ガスから大きな国家的な収入を得ているノルウェーは、発電所から出る二酸化炭素を回収して貯蔵する技術の開発に取り組み、世界最大級の研究施設があることも紹介してくれた。

大使は、気候変動研究や対策技術の開発、再生可能エネルギー技術開発での協力、天然資源の持続可能な管理の手法の開発などでノルウェー、日本の協力の余地が多いことを指摘。「両国が協力すれば、人類が直面する多くの課題の解決に貢献できる」と訴えた。

共同通信編集委員兼論説委員　井田　徹治

米国人元戦争捕虜

全員が90歳代
日米関係の成熟が多様な証言可能に

10・15（水）記者会見／司会：露木茂委員／通訳：大野理恵／出席：31人／動画

5回目になる日米草の根平和交流招聘プログラムで来日した米国人元戦争捕虜ら7人は、99歳のシュワーツ氏（前列左から2人目）を最高齢に全員が90歳代。しかし、時に立ち上がって熱弁をふるう矍鑠（かくしゃく）たる老人たちだった。

「フィリピン・パラワン島のジャングルで空港建設に従事させられ、半数が死亡した」「大森の収容所で東京大空襲に遭い、九死に一生を得た」という悲惨な体験談もあったが、「日本の工場では、日本人が昼の弁当を作って持ってきてくれた」「聖書を学んだという日本軍兵士から『神の加護があるように』と言われた」という、ほっとさせられる話もあった。

戦争の記憶、となるとアジアの隣国のことを想起せざるを得ないのだが、老人たちの証言が一方的な糾弾調になることはなかった。「日本の復興は、かつて敵同士だった日米が協力して成し遂げた。世界の国にも、そのように促すことができるだろう」との言葉が示す両国関係の成熟も、多様な証言を可能としているのだろう。

読売新聞編集委員　三好　範英

マーク・ダイブル
世界エイズ・結核・マラリア対策基金事務局長

エボラ対策でも保健基盤強化の重要性を強調

10・16（木）記者会見「HIV／エイズ」／司会：宮田一雄委員／通訳：西村好美／出席：31人／動画

世界エイズ・結核・マラリア対策基金（グローバルファンド）は2002年1月に発足し、過去10年余り、世界の三大感染症対策に大きな貢献を果たしている。2000年九州沖縄サミットで、議長国日本が途上国の感染症対策への新たな追加的資金の必要性を強調し、それが基金創設につながったことは、国際保健分野では有名だ。

ダイブル事務局長はこうした日本の貢献に感謝するとともに「エイズも結核もマラリアも、まだ終わっていない」と述べ、支援の継続を求めた。今年の厚労省の世界エイズデー国内啓発キャンペーンテーマ「AIDS IS NOT OVER ～まだ終わっていない～」を素早くメッセージに取り入れるあたりは、革新的な組織運営を目指す21世紀型国際機関トップとしてのコミュニケーション能力の高さをうかがわせた。

また、西アフリカのエボラ出血熱について、流行国3カ国では、紛争で破壊された保健基盤が再建されていないことを指摘した。ナイジェリアなど周辺国では少数の発症事例で封じ込めに成功しており、保健基盤強化が感染症の流行という危機への対応にも重要であることを強調した。

企画委員　産経新聞特別記者　宮田　一雄

ラジ・スラーニ
パレスチナ人権活動家・弁護士

ガザ地区の悲劇 パレスチナ人の尊厳を守るために

10・20（月）記者会見／司会：土生修一事務局長／通訳：中島寛／出席：28人／動画

パレスチナ人の人権擁護活動で世界的に著名なスラーニ弁護士、今回の訪日は容易ではなかった。故郷ガザ地区が、50日間に及んだイスラエル軍の攻撃で徹底的に破壊され、2100人を超えるパレスチナ人が犠牲になったためである。

スラーニ氏は、繰り返されるイスラエルの大規模攻撃について、「民間施設も標的にし、すべてのパレスチナ人を恐怖に陥れ、抵抗する意志を奪い、国家独立の目標を諦めさせる意図がある」と分析した。そのうえで、「パレスチナ人の抵抗運動は、人間の尊厳を守る正義の戦いであり、不法な占領の終結こそが平和である」と断言。最も差し迫った課題として、7年に及ぶガザ地区の封鎖の解除を要求し続ける考えを強調した。

そして、「イスラエルのネタニヤフ政権が入植地拡大を続けるならば、『2国家共存』は不可能だ。『オスロ合意』は死んだ」と述べた。

何度も逮捕され、命がけの人権擁護活動に身を捧げてきたスラーニ氏。不屈の精神と正義への信念は健在だったが、国家独立の目標実現がいっそう困難になる中で、将来、どんな「パレスチナ国家」をつくるのか、具体的なイメージを描く苦悩も感じられた。

NHK解説委員　出川　展恒

ギオルギ・マルグヴェラシヴィリ
グルジア大統領

国際法を軽視するロシア 小国の頼みの綱は民主主義連合

10・21（火）記者会見／司会：伊藤芳明理事長／通訳：長井鞠子／出席：61人／動画

ウクライナ危機の先例は2008年のグルジアとロシアとの軍事衝突だった。ロシアはこの時、グルジアからの南オセチア、アブハジアの独立を承認し影響下に収めた。会見はほぼ、ウクライナで再び国際法軽視の動きに出たロシア問題という重たいテーマに費やされた。

ロシアにさらに強い制裁を科すべきか、対話解決か。大統領のメッセージは「対話に代わる道はないのは分かるが、占領・併合を認めないという原則は国際社会が一貫して伝えるべき」だった。

天然ガスの輸入や北方領土などロシアと懸案を抱える日本は対話派。大統領はロシアに強い態度で臨み、その主張を受け入れないでほしい、とくぎを刺したことになる。

「08年の対ロシア非難の声を、国際社会がずっと維持していれば、クリミアの併合などなかったはずだ」と説得力がある。国際社会は忘れやすいのだ。いま、ロシアは南オセチアとアブハジアの行政機能を吸収し併合への動きを進めているという。

日本とは民主主義という価値を共有すると繰り返した。大国ロシアの脅威に接する小国の頼みの綱は民主主義連合だ、という本音は明快だった。

企画委員　共同通信編集委員室長　杉田　弘毅

オリバー・ホーア
2012年ロンドン五輪・パラリンピック　サイバーセキュリティ担当主任

2020年東京五輪 われわれに備えはできるのか

10・22（水）研究会「サイバーセキュリティ」⑨／司会：川上高志委員／通訳：長井鞠子／出席：44人／動画

「6年先はあっという間ですよ」と言われても近年の技術革新の速さに戸惑う身には、具体的な脅威も対処法も思い及ばないのが現実だ。

2012年のロンドン五輪で英国内閣府のサイバーセキュリティ担当を務めたホーア氏は、20年の東京五輪までには「あらゆる種類のイノベーションが進展する」と指摘。サイバー攻撃は「不可避」との前提で早急に準備を始める必要性を強調した。

ロンドン五輪でもさまざまなサイバー攻撃があったという。「テスト、テスト、テスト…」。氏が繰り返したのはリハーサルの重要さだ。

さらにサイバーテロ対策、情報収集、警察などを統合した官民連携体制の構築が有効と述べた。「国家的な行事では皆が一致協力するものです」と楽観的な見方も示したが、縦割り社会の日本にはまさに不得手な分野ではないかと思う。

巨大イベント・五輪は「放送されなければ存在しないに等しい」とも語った。ロンドンでは、緊急事態にはメディアが補完し合う態勢が取られたという。われわれにその準備ができるか。そう考えると確かに6年はあっという間だろう。

企画委員　共同通信編集局次長　川上　高志

馬渕（まぶち） 清資（きよし）
北里大学教授

バナナの皮は本当に滑った 科学と笑いでイグ・ノーベル賞

10・24（金）記者会見／司会：中井良則専務理事／出席：43人／動画

イグ・ノーベル賞なんてただの余興さ、と思っている方、それは誤解です。常識に疑問を抱き、未知の事象を探求し、だれも知らなかった事実にたどりつく。そうした科学の王道を極めないと受賞には至らない。しかも、それだけではもらえない。「笑い」という人間の奥深い精神が求められる。ノーベル賞より難しそうだ。

バナナの皮は滑る。みんな知ってはいたが、本気で調べた人はいない。専門の人工関節研究を踏まえ、実験を重ね、摩擦係数を計測する。発表した学術論文を面白く説明してもらった。

「科学の実用性を追い求めると、人間は満ち足りた至福の状態になるかもしれない。しかし、そこに笑いはあるでしょうか」。サイエンスと人間の幸福に話は及んだ。

発見の意義を英語で説き明かすバナナの歌も朗々と披露し、大きな拍手を浴びた。授賞式でも歌ったが、持ち時間は60秒しかない。賞のしきたりで8歳の女の子に「退屈だな、もうやめて」と宣言されてしまった。「日本で初めてフルバージョンを歌い切った」と満足そう。今年、最も笑った会見。動画で必見です。

日本記者クラブ専務理事　中井　良則

エルハッジ・アマドゥ・シィ
国際赤十字・赤新月社連盟事務総長

エボラ緊急対応へ さらなる国際支援訴える

10・29（水）記者会見／司会：宮田一雄委員／通訳：池田薫／出席：51人／動画

セネガル出身。国連機関勤務を経て、200人以上の応募者の中から事務総長に選ばれた。

8月に就任直後、エボラ出血熱の感染拡大に直面、西アフリカのギニア、シエラレオネに飛んだ。遺体が放置され、感染を知られたくないので自己申告が進まず、感染者の把握と安全対策が進まない―などの現状を目の当たりにした。

エボラ出血熱はマラリアなど他の熱帯病と症状が似ていて識別が難しいため、「国民に正しい情報を知らせる」ことが重要と強調。いたずらに恐怖心を持たず、埋葬の際に遺体に触れないことなどを「社会に説得する」ことも必要だと述べた。

西アフリカを中心に約2万人の医療ボランティアが活動。現地はこの時期でも気温約35度。防護服を着ると暑さ約45度の中での作業となる。「注意力が散漫にならないためにもローテーションを組むことが必要」だが、感染を恐れボランティアの集まりはよくない。「団結して活動することでお互いに守り合うことができる。そこで得た知識をそれぞれの国に持ち帰って生かすこともできる。（支援する側、される側の）双方向のパートナーシップが重要だ」とさらなる国際支援を訴えた。

東京新聞・中日新聞論説委員　熊倉　逸男

23 記者ゼミ

田中（たなか） 大雅（だいが） 東洋経済新報社デジタルメディア局長兼デジタル戦略部長

有料から完全オープンにPV至上主義を徹底

多くの一般紙がウェブやソーシャルを重視しはじめ、会員数やページビュー（PV・注）の増加を目指して試行錯誤している。東洋経済新報社のウェブサイト「東洋経済オンライン」は、ここ2、3年で月間PVが6千万、月間ユニークユーザー（UU・注）は800万人を超える人気サイトに成長したという。地方紙で会員制サイトの運営に携わる者としてはなんともうらやましい数字だ。

東洋経済オンラインは、2012年のリニューアルでそれまでの有料制から完全オープンな形に切り替えた際、ターゲットを「新世代のリーダー」に絞ったほか、徹底的にPV増加につながるサイトづくりにこだわることで、20代から40代の新聞、雑誌から「紙離れ」した若い世代を引きつけることに成功したという。懸念された雑誌購読者の減少はないといい、サイトの活性化により新たな読者を開拓した形だ。

サイトの編集面では、雑誌とは一線を画し、全く別の編集方針で取り組んでいるという。背景には、同社のデジタル部門が独立採算であることや、高いPV・UUの数字が社内的な評価を得ている面もあるのかもしれない。

新聞業界では、経営の柱に「紙」があり、デジタル媒体については、購読者向けの付加サービスや紙面のウェブ版という位置付けにしている社が、いまのところ大半だ。田中氏は「いずれ鍵をかける（有料化する）にしても、絶対数を確保してからだ」と強調する。当面は1億PVを目指すという。

「PV至上主義」に徹した取り組みは今後、新たなビジネスモデルとしてどんな姿を見せてくれるのだろうか。ヒントを探るためにも、東洋経済オンラインの動向を注視したい。

信濃毎日新聞メディア局ネット事業部　大塚　規子

（注）ページビュー＝PV：ウェブサイト内のページ閲覧回数、ユニークユーザー＝UU：ウェブサイトを訪問した人数

9・29（月）「東洋経済オンラインの挑戦」／司会：津山昭英特別企画委員／出席：23人＋ネット視聴6人

24 記者ゼミ

鈴木（すずき） 祐司（ゆうじ） 次世代メディア研究所代表

ネットは敵か味方か、それとも…

「既存メディアはとても苦しい」「放送はゆっくり降りるエレベーターだ」

穏やかな笑顔から次々と飛び出す鈴木氏の激辛コメントに身を固くして聞き入った。それはわれわれ「現役組」がうすうす感じてはいても、できれば触れられたくない「不都合な現実」そのものだ。NHKスペシャルなど現場で培った経験と最新データを織り交ぜた解説は、現実逃避をたくらむ私の甘えを許さない迫力に満ちていた。

近年、鈴木氏が番組で行ったアンケート調査によれば、「テレビに魅力を感じるか」の質問に対し、7割の回答がノー。ドラマやバラエティー番組でも相対的に視聴率の低下が止まらない。パソコンやスマートフォンなど「ネットメディア」の台頭で選択肢が増えたライフスタイルの多様化が背景にある。「番組が人々と出会いにくくなっている」と指摘、ニュースの情報源も新聞やテレビからスマホのアプリが主役になりつつあると、時代の変化を冷酷に浮き彫りにする。

さらに鈴木氏の解説は「複雑な現実」にも踏み込む。

スマホを持たせて60分のテレビ番組を視聴させたという調査結果。スマホの画面を見ていた時間は実に58分。それでもテレビを「チラ見」したわずか2分間で内容は十分理解していたという。われわれテレビの人間にとっては、あ然とするしかない残酷な結果だが、放送エリアが限られる地方テレビ局にとっては、ネットが新たな視聴者との出会いを生み、ビジネスチャンスを拡大させる成功例もあると発想の転換を説く。

いまや既存メディアはネットメディアと競合しつつも、記事やコンテンツを提供するステークホルダー（利害関係者）でもある。「既存メディアはいかにして生き残るのか」、大先輩から突き付けられた難問に身の引き締まる思いがした。

読売テレビ報道局解説デスク　山川　友基

10・3（金）「デジタル化で情報が爆発する～既存メディアに残された道～」／司会：津山昭英特別企画委員／出席：21人＋ネット視聴6人

記者ゼミ 25

八田（はった）　真行（まさゆき）　駿河台大学 経済経営学部専任講師

ニュースと技術の「すり合わせ」でデータ・ジャーナリズムを

今回のテーマは「データ・ジャーナリズムの現状と将来」。八田氏は経営情報論が専門だが、ハッカーの思想にも造詣が深く、ゼミの中で、自身が12月、匿名リークサイトを設立することを明らかにし、関心を集めた。

また、本題のデータ・ジャーナリズムについては、①生データを探し、デジタル化し、分析しやすくする②フィルターをかけ、必要な情報を取り出す③図表などで、わかりやすく可視化する④それらを意味ある「ストーリー」として示す――ことと分析。そして「その記事が言いたいこと」にあたるストーリーは「常識・直感に反するもの」が望ましいとされるとした。

実際は、この手法は、従来から社会学の研究や、一部の調査報道の中で使われてきた。それがいま、注目されているのは、コンピューター技術やSNSの発達で、取得できるデータの範囲が広がったほか、精緻で新味のあるデータの分析や表現もできるようになったためだ。

ただ、それを実現するには、プログラミングや統計、デザインなど従来の記者にないスキルが必要で、統計専門家やエンジニア、さらには、特定の分野に詳しい「プロの素人」など「異業種」の人材の進出が始まっている。

デジタル化に伴いジャーナリズムは変革期にあるが、その中でもデータ・ジャーナリズムは、「ニュース感覚」と技術スキルの高度な「すり合わせ」が必要で、モノにするのが難しい。ただ、既に異業種を含め競争は始まり、ジャーナリズムの外延は広がりだしている。フルラインで戦おうとする新聞社は、人事採用と育成のモデルを時代に合わせて修正していく必要があるだろう。

毎日新聞デジタル報道センター　尾村　洋介

10・17（金）「データ・ジャーナリズムの現状と将来」／司会：津山昭英特別企画委員／出席：16人＋ネット視聴9人

会議報告

●第445回企画委員会

（10・8　宴会場）

「2015年経済見通し研究会」の担当委員委嘱のほか、今後のゲスト候補などを協議した。

出席　会田委員長、星、脇、実、水野、樫山、別府、宮田、川上、加藤、瀬口、原田、宮内、島田、竹田、川戸、和田、大信田、村田、津山の各委員。

●第357回会報委員会

（10・9　大会議室）

11月号の編集と12月号、2015年1月号の企画について協議した。

出席　石川委員長、吉野、高橋、五十嵐、風間、佐塚、大寺、荒田、北村の各委員。

●第446回会員資格委員会

（10・16　小会議室）

11月1日付入会を審議し、理事会に答申した。

出席　小田委員長、菊池、中島、船木、辻、播摩、玉置、山本、青木の各委員。

●第117回総務委員会

（10・23　宴会場）

新委員長の西村陽一朝日新聞取締役編集担当があいさつした後、今年度上半期の中間決算と事業活動などを事務局が報告した。日本記者クラブ賞の内規改定について意見を交わし改定案を作成、理事会に上申した。

出席　西村委員長、小田、石川、会田、山田、粕谷、川嶋の各委員、伊藤理事長、飯塚、石田の両副理事長、中井専務理事。

●第559回理事会

（10・27　10階Cホール）

一、今年度上半期の中間決算と事業活動、最近の会員登録状況、創立45周年記念事業の進行状況について事務局が報告した。これを受け、伊藤理事長が「今年も理事会として会員増に努めることにしたい」と提案、了承した。

一、日本記者クラブ賞の内規改定を決定した。改定では、特別賞の候補推薦が増えるように日本新聞協会と日本民間放送連盟加盟社にも推薦枠を広げた。

一、推薦委員を1人増員し、下記8氏に日本記者クラブ賞推薦委員会委員を委嘱することを決定した。

一、クラブ賞規約と改定した内規に基づき、2015年度の日本記者クラブ賞を実施することを決定した。

出席　伊藤理事長、飯塚、石田の両副理事長、中井専務理事、西村、小田、石川、会田、佐藤（剛）、谷、佐藤（純）、平田、鳴海、西渕、篠塚、加増、松田、川嶋、木村、梅田の各理事、小林監事。

第19期日本記者クラブ賞推薦委員会

五十嵐公利（NHK出身）＝再任
鬼頭　誠（読売新聞出身）＝再任
橋場　義之（毎日新聞出身）＝再任
春名　幹男（共同通信出身）＝再任
岡部　直明（日本経済新聞出身）＝新任
野村　彰男（朝日新聞出身）＝新任
茅野　臣平（テレビ朝日出身）＝新任
音　好宏（上智大学教授）＝新任

あの夜、チャーリー検問所で

ベルリンの壁崩壊から25年

東西境界を往復 〝細い糸〟で伝えた興奮

森　千春（読売新聞社）

1989年11月9日夜、東独情勢取材の出張で東ベルリンに滞在していた私は、ホテルの一室にいた。原稿を書かなくてはならなかった。

同日夕に取材した記者会見で、支配政党、ドイツ社会主義統一党のシャボウスキ政治局員は、国外旅行に関する暫定措置を明らかにした。大幅な自由化であることは分かった。だが、出国には「申請」し「許可」を得る手続きが必要だ。

「明日は、旅行を申請する人々の長蛇の列が、役所にできるだろう」と考えていた。その時、電話が鳴った。東京本社外報部の泊まり番の同僚が、原野喜一郎ボン特派員からの情報を伝えた。西独のテレビニュースが、東ベルリン市民が「壁」に向かって殺到していると報じたと言う。

連絡がボンから直接でなく、東京経由だったのは、東独の電話事情のためだ。西独からは非常にかかりにくく、日本からの方が容易だった。

私は、慌ててホテルを出た。自分が東ベルリン入りした2日前に通ったチャーリー検問所（チェックポイント・チャーリー）に歩いて行った。ホテルからは約1・4キロの距離だ。約200人の市民が詰め掛け、騒然としていた。

警官が、国営旅行社に行って手続きをしろと言う。市民たちと旅行社に移動した。そこでも埒が明かない。「許可印なしでも出国できる」という情報が口づてで広がり、市民たちはまた検問所に向かった。時計の針が零時を過ぎたころだった。

後日、判明したのだが、ドイツ社会主義統一党は本来、旅行自由化措置を10日に発表し実施する予定だった。しかし、手違いで9日に公表してしまった。警備当局は準備ができていなかった。テレビでニュースを聞いた市民が検問所に押しかけ、当局はその圧力に屈して、ゲートを開いた。

私はいったんホテルに戻り、夕刊早版用の原稿を送り、再びチャーリー検問所に戻った。

市民たちが検問所に入っていく。同行するかどうか、一瞬ためらった。東独取材ビザが失効すると困ると思ったのだが、大丈夫だろうという勘に任せて、ついて行った。

警備兵は微笑を浮かべながら、パスポートを一瞥するだけだった。若い女性が、警備兵に食い下がるように、「帰って来られるのでしょうね」と聞いていた。いったん西に行ったら東に戻れなくなるのでは、という不安にとらわれたらしい。

無理もない。「壁」が東西ベルリンを分かつこと28年。自由往来の実現が、簡単には信じられなかったのだろう。

東西境界を通過して、西ベルリンに入ったのは、午前3時40分（日本時間午前11時40分）だった。街に入っていく市民たちの後ろ姿を見送ると、夕刊最終版用の原稿を送るために、東ベルリンに戻った。

こうして、あの夜の取材を振り返ると、隔世の感がある。携帯電話もインターネットも無縁だった。東京本社とは、ホテルの電話という一本の細い糸だけでつながっていた。ベルリンで起きている出来事の全体像がつかめず、右往左往した。

ただ、あの夜、市民たちに直に接したという手応えは、いまも残っている。行列の中で、あるいは路上で、インタビューした10人を超す市民たちは、興奮し冗舌だった。

現場を歩き、人から話を聞く。そして原稿を書く。いつの世も変わらぬ記者の基本であろう。それを世界史に残るあの夜、実行できたことは、記者として幸せだったと思う。

1989年11月10日、秋の短い日が終わる日没直前、ベルリン・ブランデンブルク門そばの「ベルリンの壁」の上には、歌い踊る人たちの歓喜の姿があった（読売新聞社・山岸直子撮影）

もり・ちはる▼1982年読売新聞入社
ベルリン　ソウル　ロンドン特派員など
2011年から論説委員

東西冷戦の象徴だった「ベルリンの壁」が崩壊して、ちょうど4半世紀。崩壊当夜、西ベルリンになだれ込んだ東独市民の人波の中にいた日本人記者2人に、現場の熱気が伝わってくる体験談を寄稿していただきました。「書いた話 書かなかった話」の特別編です。

映像伝送どうする？ 頼りは仏中継車だった

西川　吉郎（NHK）

世界が「歓喜」と伝えた壁の崩壊、私はこの歴史的な瞬間の〝栄誉ある〟目撃者の1人となった。11月9日、東ベルリン側にいて取材していた私は、午後8時過ぎ、東西間の表玄関ともいえる検問所、通称「チェックポイント・チャーリー」に着いた。

入り口前の広場は、すでに群衆に埋め尽くされ、前に進むこともできない状態だった。やがてゆっくり動きだした群衆は、検問所の施設の中に流れ込み、私もそれに流されるように歩行者用の狭い通路を押し合いへし合いしながら、西側にたどりついてしまった。

パスポートの確認もなかった。傍らにはカメラマンとディレクターが一緒だった。私はカメラマンの後ろから彼のベルトを握りしめ、国境警備隊がわれわれを制止するため威嚇射撃をしてこないか、警棒などを手に襲いかかってこないか、その際にはカメラマンを引き倒してでも身を守らなければと本気で考えていた。

それまでもたびたび東ベルリンに入り取材してきた経験では、取材クルーが壁に近づくだけで、どこからともなく東独警察のパトカーが現れて呼び止められるなど、目に見えない徹底した監視ぶりに、いつも薄寒い思いをしてきた。

先立つ記者会見で、東ドイツ政権は西側への出国を可能とする原則を明らかにしていたが、実施の詳細について具体的な答えの用意はなく、居合わせた多くの記者は半信半疑であった。

のちに政権は東西間の行き来をこの日まだ認めていたわけではなかった経緯が明らかになっているが、秩序を重んじるドイツ人気性はどこかにいき、国境警備隊は、流れ出る群衆を押しとどめることはしなかった。あの時の東ドイツの群衆の熱気、自由に対する切望が、結局は共産主義の厚い壁を突き崩したと言えるだろう。

検問所の西側では東側からの訪問者を迎える人たちが集まり始めており、シャンパンをかけあい、喜びの抱擁を繰り広げる「歓喜」の祭りが始まった。私も後戻りのできない歴史的な事態のさなかにあることを理解した。

テレビ記者として検問所の入り口や出口などでリポートをしていたのは当然だが、問題は、これをどのように日本まで届けるかだった。西ベルリンは、周囲を東ドイツ、東ベルリンに囲まれた、いわば陸の孤島だ。映像伝送と言えば、唯一のテレビ局、自由ベルリン放送だけがその機能を持っていた。しかし、ここから外国に出ている伝送回線は、西ドイツに向かう一本しかなく、当夜から西ドイツのテレビが独占することになった。

一方、東側でも東ドイツ国営放送局から伝送が考えられたが、これも当局が西側のテレビ局の使用をしばらく認めず、現在のように簡易な装置がない当時、せっかく撮影した映像を送る手段がなくなってしまった。このため、当初は電話による音声リポートで対応せざるを得ず、悔しい思いをした。

数日すると、フランスのテレビ電送公社の衛星中継車が陸路ベルリンまで到着し、この回線の一部を使わせてもらうことができ、初めて独自の伝送、そして中継にこぎつけた。

また、東ドイツ国営テレビも中継車を用意するなどしだしたが、旧ソビエトの中継衛星を介した回線は、不安定でほとんど使えなかった記憶がある。

ただ、フランスの中継車も使えるのは基本的に現地時間の未明に限られることが多く、日ごとに寒さを増すベルリンの運河沿いの空き地に止めた中継車まで日中取材した映像を運び、フランス人オペレーターと伝送したことを、いまでも鮮明に思い出す。

ベルリンの壁崩壊から間もなく、東西ドイツ国境も開かれた。ハノーバー近くの村では、もともと1つであった村を分断してきた壁に1メートルほどの隙間が作られて、徒歩で行き来が始まった。いそいそと西側に向かう男性が、壁を指して「これまではここが世界の終わりだったが、今日からはここから世界が始まる」と話していたのが、いまでも忘れられない一言になっている。

にしかわ・よしお▼1980年NHK入局　パリ　ワシントン特派員など　2014年から解説委員長

香港大規模デモ

人口700万人の「民意」とは

長引く占拠　〝寝たら終わり〟の日々続く

鈴木　玲子（毎日新聞社）

香港で次期行政長官選挙制度に反発する民主派の学生らによる大規模デモ発生から約1カ月。民主派は政府庁舎などがある金鐘（アドミラリティ）地区の幹線道路を最大拠点に3カ所で占拠を続けている。

もともと、民主派は10月1日に金融街の中環（セントラル）地区を民衆で埋め尽くし香港政府に圧力をかけようという街頭行動「中環占拠」（オキュパイ・セントラル）を計画していた。ところが学生らが9月22日に授業ボイコットを始め、政府庁舎前で抗議集会を開くなど急速に発展。民主派は28日、急きょ前倒して開始を宣言。私は駐在している台北で、速報を見た瞬間「しまった」と心の中で叫んだ。すぐに香港に飛んだ。

金鐘周辺のあちこちでデモ隊と警察がにらみ合っていた。警察が鎮圧のため催涙弾をぶっ放す。一緒に浴びては仕事にならない。翌日、スポーツ店で、「みんなデモに行くからこれを買っているよ」という店員一押しの大きめのゴーグルを買った。

9月末でも気温30度以上、湿度も90％を超す香港。警官隊とデモ隊が衝突するたびにゴーグルとマスクで防備して臨んだが、すぐに視界が曇って見えなくなる。マスクで息も絶え絶え。それでもデモ隊が、警察の使う催涙スプレーを防ぐために振り回す傘で目を刺されそうになる怖さを思えば、はるかにましだった。

深夜の衝突逃がしてはと不安抱え

連日、不安をかき立てられたのが深夜の衝突だ。午前0時を回ると、きな臭くなる。10月15日には午前2時半、警察が急きょデモ隊が新たに占拠した道路で強制排除を行うと発表。慌てて走った。寝ていないでよかったと心底思ったが、さらに強制排除が続く可能性があり、毎夜、「寝ると終わりだ」という不安と睡魔が交錯した。現場まで走れる距離のホテルには世界中のメディアが押し寄せ、どこも満室だ。

香港の抗議行動は、今春に台湾で起こった対中経済協定に反発した学生運動と共通点を感じる。いずれも運動の中心が学生で、これまでの運動の担い手が一歩退いた形。これが「政治闘争」の色合いを帯びた旧来の運動を敬遠する住民にも支持を広げた。路上で学生が「ここで退いたら民主と自由が失われる」と必死に訴える姿は、台湾の学生たちの姿と重なり、さらに25年前の北京の天安門広場でハンストを続けた学生を思い出させた。若者のかたくななまでの純粋さはまぶしさを放っていた。

求心力欠けるリーダー　騒乱への危うさ漂う

台湾との大きな違いはリーダーだろう。台湾ではリーダー2人が圧倒的なカリスマ性を放っていた。取材しながら、この2人なら最後は撤退に反対する強硬派を説得できるだろうと感じた。だが香港のリーダーには絶対的な存在感がにじまない。求心力に欠け、強硬派を押さえ込めていないのが実情だ。撤退をめぐって騒乱が起きかねない危うさが漂う。

取材で最も頭を悩ませるのが「民意」だ。大学の世論調査では、10月中旬、民主派デモ「支持」が38％と、9月の前回調査から7ポイント近く上昇し、「不支持」（36％）を初めて上回った。多いときデモ参加者は10万人以上に達した。

一方、親中派は占拠反対の署名活動を始め、初日だけで32万人分が集まった。長引く占拠に対し「学生の主張は分かるが、混乱はもううんざり」と漏らす住民は多い。道路占拠でバスはルート変更し、迂回路は大渋滞。デモ隊と占拠反対派の小競り合いは日常茶飯事で、香港社会に深い亀裂を生んだ。

人口700万人の「民意」とは何か。それをいかに伝えるのか。自分自身に問いかけている。

香港の次期行政長官選挙制度に反発する学生ら民主派の動向に、世界中のメディアが注目した（10月10日／金鐘地区の占拠エリアで／筆者撮影）

すずき・れいこ▼1991年入社　横浜支局　社会部　上海支局などを経て　2013年から台北支局

高円宮典子さん結婚

「2千年」を超えた縁 県全体で見守り祝福

斎藤　敦
（山陰中央新報社）

島根県といわれて、真っ先に思い浮かべるのは何か。全国の人に聞いて必ず返ってくる答えが、出雲大社（出雲市）だ。高円宮家の次女典子さん（26）が10月5日に嫁いだのは、その大社で代々宮司を務める「出雲国造家」の1つ、千家家だ。

皇族の結婚は天皇、皇后両陛下の長女黒田清子さんの2005年以来。夫の千家国麿さん（41）は、出雲大社の権宮司で、ゆくゆくは父親の宮司・尊祐さんの後を受け継ぐ身だ。皇族と国造家の「縁結び」に島根県全体が祝賀ムードに包まれた。

5月の婚約内定会見で、国麿さんの発言が印象深かった。「私どもの家の初代が皇祖、アマテラスオオミカミの次男と伝えられています。2千年を超える時を経て、きょうという日を迎えたことに深いご縁を感じています」

「2千年を超える時」というのは、日本書記の神話によった言葉だ。高天原へ国を譲ったオオクニヌシの神殿をつかさどるため、出雲へ遣わされたアマテラスの次男アメノホヒを出雲国造は祖神とし、オオクニヌシを祭る出雲大社を守ってきた。

史実でも、国造の伝統は古さが際立つ。律令制以前の官職である国造が、出雲国では律令制下でも力を持ち続け、代替わりの際は都に上り、「神賀詞」と呼ばれるお祝いの言葉を天皇に奏上した。

千家家は、故高円宮と尊祐さんが旧知の仲だったことから、宮家と家族ぐるみの交際が続き、2人の結婚話も自然と持ち上がったという。

結婚式が行われる拝殿へ親族と共に向かう高円宮家の次女典子さん（手前右）と千家国麿さん（手前左）
（出雲市大社町杵築東の出雲大社／山陰中央新報社提供）

山陰中央新報は5月の婚約内定や、10月の挙式で、交際中の2人と接した出雲の人々を中心に、地元サイド記事を仕立てた。ラムサール条約登録地の宍道湖で野鳥観察をしたり、名物の出雲そばを味わったりと、ほのぼのとした交際を見守った関係者は結婚を心から祝福した。

■新観光キャンペーンにも貢献

島根県は12年の古事記編さん1300年、13年の出雲大社本殿の遷宮にちなんだ観光キャンペーンを推進した。特に遷宮効果は著しく、県の調査では、13年の県内入り込み客は前年比26％増の延べ3680万人に達した。県はその勢いを継続させようと、14年から「ご縁」をキーワードに新キャンペーンを張るが、2人の結婚は絶好のタイミングだった。

出雲大社拝殿で執り行われた2人の結婚式では、時折小雨が降る天候にもかかわらず、約3千人が境内で小旗を振って祝福した。大社で式を挙げたいという県内外からの問い合わせもぐっと増えたという。

千家家には地域貢献への気持ちが随所に見られた。6日に松江市内であった披露宴では、チョウザメやヤマトシジミなど地元のブランド食材をふんだんに使い、生産者を喜ばせた。婚約会見で国麿さんが身につけたピンクのネクタイは、神話に登場する白ウサギ柄の地元オリジナル品。ピンクが品切れになったのを見越してか、地元の行事には色違いを着用し、いっそうのPRにつながった。

島根は旧暦10月を「神在月」と呼ぶ。男女の縁組を話し合うため、全国の神々が出雲に集うとされるからだ。各神社の儀式で最もにぎわう出雲大社の神在祭は、今年は12月1日から。今回の慶事によって「縁結びの地」への全国の関心がどれだけアップしているか、注視している。

さいとう・あつし▼1988年入社
報道部　安来支局長　米子総局報道部長などを経て　14年から編集局次長兼地域報道部長

一口メモ

出雲大社　国譲り神話に登場するオオクニヌシノミコトを祭る。七福神の大黒様と習合し、さらに縁結びの神様としても信仰されている。国宝の本殿は高さ24メートルで、現存する神社建築で最も高い。60年ぶりの大改修を終え、2013年にご神体を本殿内に戻す正遷座祭が執り行われた。境内では鎌倉時代の巨大柱根が出土し、古代の文献に登場する高さ40メートル以上の高層神殿の存在を裏付けた。

被災地通信㉘ 岩手日報　陸前高田支局

待望の拠点再建で 一人一人の復興後押し

斎藤　孟（岩手日報社陸前高田支局）

岩手日報社陸前高田支局は9月21日、陸前高田市高田町鳴石（なるいし）に再建し、業務を開始した。震災から3年半でようやく、陸前高田市に戻ることができた。この間、全国の新聞社からも多くの支援や励ましを受けた。地域の皆さんの協力、支えがあってこその再建で、感謝に堪えない。

新支局舎は、市役所に徒歩3分ほどの高台の住宅街。鉄骨造り2階建てで、1階が事務所、2階が支局長住居。記者3人が常駐する。同市高田町森の前地区にあった前支局は2011年3月11日の東日本大震災で流失。同年4月、同じく全壊した大船渡支局との合同支局を大船渡市盛（さかり）町（ちょう）に開設し、業務に当たってきた。

合同支局開設後も、陸前高田支局の再建は大きな課題だった。当初は、他事業所と中小企業基盤整備機構の仮設施設に申し込んだが、「新聞社は支援対象外」との審査を受け、暗礁に乗り上げた。空き家や空き用地を探したが、市街地全体が被災しており難航。不動産業者だけでなく、地元の販売店や住民に協力をお願いし昨年冬に、ようやく用地のめどが立ち、建設にこぎ着けた。

これまで、大船渡市から陸前高田市へは車で片道30分。朝、合同支局を出ると、戻るのは夕方から夜で、車内で原稿を書くことも多かったが、その苦労は解消された。何より住民との距離が縮まったことがうれしい。

再建し10月8日に竣工式を行った岩手日報社陸前高田支局（陸前高田市高田町／岩手日報社提供）

陸前高田支局は、東京五輪と同じ年の1964年3月11日に県内15番目の支局として開設した。私で支局長は13人目で、住民と話しているとしばしば、歴代の支局長との思い出話に花が咲く。長年、支局舎があった森の前地区など地域に一住民として仲間に入れてもらい、お世話になってきた。

特に震災後は、家族や大切な人を亡くしたり、自宅や職場を失ったり、大変な中で多くの方に取材にご協力いただいている。支局が戻ったからこそ、取材活動を通じて、恩返しをしていかなければならないと強く思う。

■災害公営住宅への入居始まったが…

市内では10月1日に、第1号の災害公営住宅（120戸）の入居が始まったばかり。同住宅は市内で千戸建設予定だが、14年度内の完成見込みは218戸。住宅再建の進み具合の指標とされる「被災者生活再建支援金」で、住宅再建時に受給する加算支援金を受けたのは10月21日時点で全体の34％。中心市街地や高台、住宅地を造成する土地区画整理事業の完了見込みは18年度で、まだまだ時間がかかる。

震災から3年8カ月。住民の生活再建に関わる課題に加え、15年度までの国の復興交付金事業、災害復旧事業の延長、被災跡地の土地利用問題など新たな問題も発生している。先行きが見えない中、どう再建の気力を保ち、希望を持ち続けるか。行政には、丁寧な説明と情報発信を求めたい。復興予算の確保や事業期間延長など、復興が加速するよう道を開くことが政治の役割だ。

災害公営住宅で暮らす人、自力で自宅を再建した人、仮設住宅で暮らす人。時間がたつほど、一人一人の置かれた状況が異なる。数字でひとくくりにはできない、個々の課題に目を向け、それぞれが1日も早い生活再建につながるように、課題の掘り起こしと情報発信に努めたい。

陸前高田支局は陸前高田市高田町鳴石48の4。電話0192・55・2590。陸前高田市にお越しの際は、気軽に立ち寄ってください。

さいとう・たけし▼2004年入社　11年5月から陸前高田支局　12年4月から支局長

私が会ったあの人

サマート・スマグーロフさん
ソビエト将校の誇りとカザフ人の英知

石川　一洋（NHK）

1992年春、セミパラチンスク核実験場の放射線防御部隊研究室。「放射線防御部の責任者としてあなた方の除染をせずにこの実験室を出すわけにはいかない」。鋭い眼光のカザフ人・サマートが机の上に出したのは、純粋アルコールと水、黒パンだった。アルコールと水を混ぜ、飲み干すのが実験場伝統の〝除染〟だった。私の品定めをしたのであろう。

サマートの愛称で米ソの核実験関係者に親しまれたスマグーロフ大佐は、セミパラチンスク核実験場の最後の放射線防御部長だ。ソビエト将校の誇りと矜持、遊牧民の末裔カザフ人としての英知を備えていた。大学で核物理学を専攻、卒業後の70年、国命で実験場に配属、地下核実験の専門家となった。地下核実験探知技術の確立のために88年、米ソ共同で行われた地下核実験のロシア側責任者となった。生きた核実験のデータベースだった。

セミパラチンスク核実験場は、いまの中央アジア・カザフスタンの北部にあるソビエト連邦最大の核実験場だ。その中核が放射線防御部だった。核実験の時の放射能の拡散状況を予想し、実験直後に調べ、さらに核実験場内の放射能汚染地帯を管理し、科学的な調査を継続する部隊だった。チェルノブイリ原発事故直後に現場に入り、放射能測定を行ったのもサマートら放射線防御部隊だった。危険を冒し4号炉の屋根などの除染を行ったのもサマートらである。

部隊の歴史には、72年当時のトラーピン部長がブレジネフ書記長に核兵器の廃絶を訴える手紙を書き、解任されるという事件も起きている。厳しい情報統制の中で、サマートら放射線防御部の部下たちはその手紙の原文を密かに保管し続けた。このエピソードは93年放送のNHKスペシャル「核実験戦慄の記録」の中で紹介した。サマートとの出会いがなければ知ることはなかったろう。

1994年、地下核実験場で筆者のインタビューを受けるスマグーロフ大佐

「ソビエトがスターウォーズに備え、核実験を行った場所です」。94年夏のことだった。岩山から直径2メートルを超える金属製の筒が、まっすぐ1キロほども伸びていた。筒の中は宇宙空間を想定して真空とされ、その中に衛星や通信機器、ミサイルの誘導装置などが置かれた。80年代、第4世代の核爆弾を地下で爆発させ、指向性のある放射線が真空の筒の中を通過した。宇宙空間での核爆発の効果を調べたのである。

サマートはソビエト将校の誇りを生涯大切にしていた。94年、セミパラチンスク核実験部隊は解体され、放射線防御部の歴史も閉じた。その夏、サマートは私の前で泣き崩れたことがある。そして案内してくれたのが地下核実験の跡地だった。核実験部隊が解体されれば、地下核実験跡地の保管もできなくなるだろう。その前に映像として記録に残しておきたいと思ったのかもしれない。

晩年、サマートはロシア中部のサラトフで年金生活者として暮らした。しかし、まさに偉大な年金生活者だった。北朝鮮で核実験が起きれば、地震波などから直ちに核爆発の威力を計算した。福島の原発事故の時は、チェルノブイリの経験から巨大なコンクリートミキサーを原子炉の冷却に使うよう提案した。サマートが紹介すればロシアの研究所の扉はいつも開いた。

今年7月「パパが死にました」というメールが届いた。サマート、まだ68歳だった。

（いしかわ・いちよう　解説委員）

10月号の稲熊均さん（中日・東京新聞）から今月号は石川一洋さんへ。12月号は栢俊彦さん（日本経済新聞）にバトンが渡ります。

試写室 イラク チグリスに浮かぶ平和 (10.1)

「日本が支持したことを覚えていますか」

偶然、会った先輩に誘われ、綿井健陽監督のドキュメンタリー映画「イラク　チグリスに浮かぶ平和」を見た。あっという間の108分だった。

大量破壊兵器保有を理由にしたイラク戦争開戦から10年。あるイラク人家族を軸に映し出される年月は、やわらかなヒューマニズムをみじんにする理不尽な苦しみと生と死に満ちている。綿井氏は正面からそれを撮り続ける。綿井氏自身もストーリーの一部だ。彼の精神の強さにも、引き出される人々の言葉の力にも、深く感銘した。

「日本が支持したことを覚えていますか」

映画の中の問いに虚を突かれた。もちろん覚えている、と頭の中で私は自分に言い聞かせた。が、本当にそうか。「○○人死亡」というほぼ記号化した最近の報道に、その事実どころか、米軍の快進撃を強調する米メディアの従軍取材に抱いた危機感さえも、私の中でかすみつつあったではないか。米軍の誤爆で両足を失った女性の「米国を支援した日本にも責任がある」という言葉が、だから痛かったのだ。

「黙っていた私たちにも責任がある」。武装集団に銃撃された男性は言う。「何の意味も理由も大義もない戦争」。愛する3人の子どもたちを米軍空爆で失った主人公は言う。悲しみとやり場のない怒りを抱え、それでも新たな命が生まれ、人々は懸命に日々を生きる。歴史や人生の真実は、普通の人の言葉の中にある。あらためて、そう思った。

家族がチグリス川を遊覧する場面は、おとぎ話のように美しい。爆発もなく弾丸も届かない平和で安全な場所、チグリス川を巡る舟の上で、人々の表情は無防備なほどの幸福に輝く。この場面が永遠に続くことを観客は願う。だが、やがて舟は岸に着く。

共同通信デジタル編成部　舟越　美夏

東京・ポレポレ東中野ほか　全国順次公開
©ソネットエンタテインメント／綿井健陽
http://www.peace-tigris.com/

試写室 無知の知 (10.27)

原発事故インタビュー「無知、後、悟り」開けたか

発生から3年半以上たっても、原因の一端すら明らかになっていない福島原発事故。その巨大な迷宮に向かって、石田朝也監督はカメラとマイクだけを手に、インタビュー突撃取材を始めた。ドキュメンタリー作者として、米国の突貫小僧、マイケル・ムーア監督を視野に入れながら。

監督は、仮設住宅脇のお花畑で、避難住民の強烈なメディア批判に遭遇する。「マスコミのインタビュー取材は、私たちが話す中身を、自分たちのストーリーに合わせてねじ曲げる」

「無知の知」という映画のタイトルも、「ひとりの無知な男が聞いてみた。あのときのこと、これからのこと」という惹句も、この手厳しいメディア批判を踏まえた、予備知識抜きの無手勝流宣言なのだろう。

予断と偏見、思い込みとレッテル貼りを排して、相手の言葉と思いを、丸ごと受け止めようという監督の流儀は、部分的には成功している。

平穏で豊かな日常生活を、突然、理不尽に奪われた被災・避難住民だが、インタビューに応じた人々は、いまを前向きに生きている。淡々と、ある種の諦観を含んだ語り口からは、黙ってのみ込んできた不条理、悲嘆、絶望、怒りの痛みと重みが、浮かび上がってくる。

一方、理屈と制度を積み重ねた強固なシステムに対しては、無知は常識の虚を突く知的な剣たりえない。元原子力委員長や「御用学者と呼ばれた研究者」が披歴する、福島の現実とは無縁の「永遠の一般論」を、ただ甘受し、切り返せていない。

「無知の知」ではなく、「無知、後（のち）、悟り」を掲げ、迷宮の深奥に踏み込む次回作を期待する。マイケル・ムーアは、もっともらしい一般論の内実に潜む統計数字のワナや、論理のすり替えを見抜く博学の人だ。

日本経済新聞出身　科学ジャーナリスト　塩谷　喜雄

東京・ポレポレ東中野ほか　全国順次公開
©「無知の知」製作委員会2014
http://muchinochi.jp/top.html

マイBOOK マイPR

■聖路加病院で働くということ

早瀬　圭一（毎日新聞出身）

個性的な4人の医師・看護師を主人公に　「聖路加は午前中に金持ちを診て、午後から隅田川辺りの浮浪者の診察に行く。そういう病院なんだ」。本当にそうなのか―。小児がん治療一筋40年の細谷亮太。訪問看護の押川真喜子。看護師養成に専念する井部俊子。地下鉄サリン事件で陣頭指揮を執り、今も救急の第一線に立つ石松伸一。個性的で突出した4人を主人公に「日本一を目指す病院」の隅々まで徹底取材した。「医療と看護」を探る。12月22日（月）、23日（火）の両日、NHKラジオ深夜便に出演します。

岩波書店
2100円（税別）

■日本亡命期の梁啓超

李　海（香港衛星テレビ東京支局特派員）

明治日本における中国人ジャーナリストの奮闘　本書は14年にわたる梁啓超の日本亡命時代に焦点を当て、梁啓超その人の思想形成と日本人関係者との交流を通じて、革命思想家梁啓超の求めた世界に迫った。版権問題、教育思想、訳書など、梁啓超の多彩な活動から、明治日中の精神、文明上のかかわり、中国と日本が置かれていた歴史的背景、当時の両国の知識人たちの社会変革に対する意気込みを感じ取ることができる。

桜美林大学北東アジア総合研究所
3000円（税別）

■本の底力 ネット・ウェブ時代に本を読む

高橋　文夫（日本経済新聞出身）

新しい時代の読書法　本を読むのが商売といってよい大学生の「10人に4人は一日の平均読書時間がゼロ」――こんな調査結果が最近明らかになりました。残念なことです。ネット・ウェブ時代にあってむしろ本はいっそう読まれてよい、と考えるからです。なぜ？　それにはクラブのラウンジ書棚などで、本書をお手に取りご瞥見（べっけん）いただくのが一番手っ取り早い、といえます。版元作成の帯の惹句にいわく。「ネット・ウェブ全盛のいまだからこそ、必要とされる新時代の読書法。スマホが手放せないあなたも、本好きのあなたも、必読!!」

新曜社
1600円（税別）

〈寄贈書〉

『挙国の体当たり　戦時社説150本を書き通した新聞人の独白』（森正蔵著）

森氏は1900年滋賀県生まれで東京外大卒業後、毎日新聞に入社。奉天、モスクワ特派員後、40年に外信部ロシア課長、日米開戦時は論説委員。開戦後は最前線に従軍し、社会部長で45年の終戦を迎えた。同年末に厳しい言論統制下での敗戦までの実態を暴露した『旋風二十年』を出版、一大ベストセラーに。その後、取締役を歴任し52歳で急死した。

森氏は36年から52年まで1日も欠かさず書いた42冊の日記を残した。戦争、敗戦、占領下の大激動期の政治、社会情勢から新聞社、記者活動の内幕、家庭生活や食糧窮乏の実態まで克明に記録した希有の日記で、本書は開戦から敗戦までの4年間分を出版したもの。日本のジャーナリズム史に残る金字塔の1冊である。

（毎日新聞出身　前坂　俊之）

毎日ワンズ
1700円（税別）

■藤田博司さんの遺著■

『ジャーナリズムよ　メディア批評の15年』

筆者自身による紹介文が載るはずだったこの欄を藤田さんの急逝（10月5日未明）で代筆する羽目になりました。この本の発行日が告別式の8日だったことに驚きを禁じ得ません。

保田龍夫（新聞通信調査会）

＊

現役当時は共同通信社のワシントン支局長や論説副委員長、退職後は上智大学などでジャーナリズム論を教えた筆者が1999年から2014年まで新聞通信調査会発行の月刊誌「メディア展望」に書き続けたコラム「メディア談話室」の中から3分の1ほどの65点を選んで438ページにまとめた。

「ジャーナリズムの原則」「ジャーナリズムの役割」「劣化するジャーナリズム」「政治報道の足かせ」の4章に分かれ、短い解説やキーワード索引を付している。「『わが国症候群』を見直そう」「主筆と新聞の異様な沈黙」「首相へのメモが示す権力との癒着」「（安倍）首相の言葉には検証が必要だ」など舌鋒は鋭い。　新聞通信調査会　2000円（税別）

日本記者クラブ賞・同特別賞候補をご推薦ください

日本記者クラブ賞・同特別賞の募集が始まりました。締め切りは来年１月31日(土)です。両賞の目的や受賞者の資格、選考基準は下記の通りです。

■日本記者クラブ賞

取材、報道、評論活動などを通じてジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を顕彰します。会員および会員社に属する方々が対象です。クラブ会員であれば会員種別にかかわらず、どなたでも推薦できます。

〈選考基準〉

(1)現役ジャーナリスト個人に与えられる賞である(現役という意味は現に活動しているという意味で故人は対象としない)。

(2)スクープ賞ではなく、特に最近数年間の業績が顕著であることが重視される。

(3)その存在および業績が、ジャーナリズムの活性化と成熟にインパクトを与えるような個人を顕彰する。

■日本記者クラブ賞特別賞

2012年に創設された特別賞は、原則として会員以外のジャーナリズム活動を顕彰します。ただし、会員社の取材班・番組班などチームとしての業績も対象となります。クラブ会員社の記者個人はクラブ賞、チームは特別賞というわけです。会員社系列の報道機関での活動も該当します。

内規が改定され、今回から日本新聞協会および日本民間放送連盟加盟社に属する方も、特別賞候補を推薦できるようになりました。特別賞にふさわしい候補を幅広くご推薦ください。

〈選考基準〉

(1)特別賞はジャーナリズムの向上と発展につながる特筆すべき業績や活動を幅広く顕彰する。

(2)個人でも、取材報道チーム・ジャーナリズム団体でも特別賞の対象になる。原則として本クラブの会員(個人、法人)以外を対象とするが、特定の取材班・番組班などチームとしてのジャーナリズム活動については会員あるいは会員社でも対象から排除しない。

(3)活動の場が日本国内か国外か、日本人か外国人か、現役か故人かは問わない。媒体の種類も問わない。

＊

両賞とも、推薦者は所定の用紙で、推薦理由(2000字以内)と参考資料を添えて提出願います。推薦書はクラブのウェブサイトからもダウンロードできます。

詳細は事務局の本庄(03-3503-2754)へお問い合わせください。

【最近の受賞者】

《クラブ賞》

2012年度　萩尾信也さん(毎日新聞社)
2013年度　小山鉄郎さん(共同通信社)
2014年度　橋本五郎さん(読売新聞社)
　　山田孝男さん(毎日新聞社)

《特別賞》

2012年度　福島中央テレビ報道制作局
　　石巻日日新聞社
2013年度　山本美香さん(ジャパンプレス、故人)
2014年度　(受賞なし)

新しいOB会員

伊藤　千尋(いとう ちひろ)　1974年朝日新聞入社。サンパウロ、バルセロナ、ロサンゼルスの各支局長などを経て9月退社。

１本の記事が読者を感動させる「新聞の詩人」を目指し、40年で71カ国を取材しました。今後の10年で100カ国に増やすつもりです。

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■第21回「新聞配達に関するエッセーコンテスト」表彰式　主催：日本新聞協会

国内外から3478編の応募作品が寄せられた。岩國哲人・元衆院議員(大学生・社会人部門)、山田美早紀さん(中学生・高校生部門)、安藤円樺さん(小学生部門)ら最優秀賞受賞者のほか、各部門の審査員特別賞の表彰式が行われた。入賞作品は日本新聞協会ウェブサイトで読むことができる。(10.11　10階ホール)

■新聞週間記念の集い(東京地区)

主催：日本新聞協会

スポーツ界における女性アスリートの活躍に焦点を当て「日本の未来は女子力が支える――スポーツ報道の現場からの提言」の題でパネルディスカッションが行われた。パネリストは高倉麻子氏(日本サッカー協会ナショナルコーチングスタッフ)、萩原智子氏(シドニー五輪水泳元日本代表)、井村雅代氏(シンクロナイズドスイミング日本代表コーチ)、小松成美氏(ノンフィクション作家)。出席者は約130人。(10.17　10階ホール)

■大分県立美術館開館記者会見

来年４月に開館する大分県立美術館の概要発表会見が行われた。建築デザインを手がけたプリツカー賞受賞者の坂茂氏、館長に就任する武蔵野美術大学教授の新見隆氏が「五感で楽しむことができ、自宅のリビングと思えるようにリラックスできる、大分県民とともに成長する美術館」をコンセプトとしたことなどを説明した。(10.23　10階ホール)

■放送人政治懇話会

テレビ・ラジオ局の現役・OBらが政治家を招き、定期的に勉強会を行っている。10月は枝野幸男民主党幹事長(10.8)、林芳正前農水大臣(10.15)、安住淳民主党国対委員長代理(10.29)をゲストに招いた。

ベトナム外務報道官がクラブ訪問

10月３日、ベトナムのレ・ハイ・ビン外務報道官がクラブを訪問し、両国のマスメディア事情について中井専務理事らと意見交換した。ベトナムにはハノイを中心に外国メディア支局が31あり、そのうち日本は最多の９社で、両国関係の現状を象徴している、と。中国は４社とのことで、思ったより少なく、これも両国関係の表れか。在京ベトナム特派員は国営の通信社やテレビなど３社あり、これは思ったより多い。ビン外務報道官は週１回定例会見を開いている。欧米方式の情報発信を心掛けているようだ。(石川洋)

レストラン＊価格はすべて税込です

予約電話　和食 3503-2723　洋食 3503-2766

和食　霜月懐石（11/28まで）

先付：天使の海老菊花とんぶり和えほか　お椀：蟹真丈　お造り：３点盛り　焼物：甘鯛柚庵焼　煮物：信田巻ほか　揚物：わかさぎ天ぷら　食事：鰊そば　水菓子：季節の果物　グラス冷酒付き（5,400円）　（板長：大井由光）

洋食　冷製ローストビーフとブイヤベースコース（12/26まで）

冷製ローストビーフサラダ仕立て　ホースラディッシュのソース、マルセイユ風魚介のブイヤベース、フルーツグラタンとバニラアイスクリーム、パン、コーヒー付き（4,212円）。ランチ、ディナー（土曜日はランチのみ９階レストラン）ともにご利用いただけます。　（シェフ：黒須修一）

特製きりたんぽ鍋をどうぞ　11/21(金)まで

毎年、好評をいただいている、冬の味わい「きりたんぽ鍋」。今年は産地直送で比内地鶏を仕入れ、アラスカ特製のだし汁でサービスします。秋田魁新報東京支社お薦めの地酒とともにお楽しみください。お一人2,500円で、お二人からお受けします。ご予約は03-3503-2723までお願いします。

忘年会、新年会は個室をご利用ください

12月１日（月）～ 2015年１月31日（土）

忘年会・新年会、社内の集まりや会合に、お手ごろなプランをご利用ください。お一人3,240円（洋食８品と寿司、そば）で、1,404円をプラスして２時間の飲み放題にもできます（別途、部屋代）。10 ～ 40人までお受けします。ご予約は03-3503-2724へ。

会員社ホール　｜イ｜ベ｜ン｜ト｜情｜報｜

浜離宮朝日ホール▶田部京子BBワークス第４回　田部京子ピアノ・リサイタル　ベートーベンのソナタ「月光」「告別」や、ブラームスの「６つのピアノ小品」など豪華なプログラムをお届けします。
12/13（土）15時開演（5,200円）●問い合わせ：03-3267-9990●http://www.asahi-hall.jp

日経ホール▶シングフォニカー　初来日クリスマス・コンサート　クラシック、ポピュラーのほか世界のクリスマス・ソングをメドレーでお送りします。
12/19（金）18時開演（3,500円）●問い合わせ：03-3943-7066●http://www.nikkei-hall.com

サントリーホール▶ジルヴェスター・コンサート2014 アンドレア・ロスト、メルツァード・モンタゼーリ、ウィーン・フォルクスオーパー交響楽団が出演。美しい音楽で新しい年を迎えてみませんか。
12/31（水）22時開演（6,000 ～ 12,000円）●問い合わせ：0570-55-0017●http://suntory.jp/HALL/

王子ホール▶銀座ぶらっとコンサート#92　平井千絵“ぴあのの部屋”Vol.6　人気ギタリスト鈴木大介をゲストに迎え、オペラアリアをモチーフにした魅力的な作品をご紹介します。
12/8（月）13時半開演（2,800円）●問い合わせ：03-3567-9990●http://www.ojihall.jp/

11月１日、クラブは創立45周年を迎えました。記念日にあわせ、下記の２つの記念事業を行いました。

■『とっておきの話（七）』刊行　若手記者にも差しあげます

『とっておきの話（七）』を全会員にお届けしました。第七巻は、2009年４月号から14年３月号までのクラブ会報に掲載された「書いた話　書かなかった話」と「新春随想」を収録しました。OB会員の“ニュース現場”での体験や取材上の裏話は歴史のひとコマを伝えるものであり、日本のジャーナリズム史ともいえます。

若手記者たちにも幅広く読んでいただきたいと思っています。希望者には無料で差しあげます。

詳細は下記の担当者までお問い合わせください。
担当：本庄　電話　03-3503-2754
メールアドレス：honjo@jnpc.or.jp

■クラブ会報　創刊号からウェブサイトで読めます

会報のデジタル化が完了しました。1970年３月の創刊号から全ページのPDF版をクラブのウェブサイトで読めます。会報別冊の「記録版」として、かつて発行していた重要会見の全文記録（1979年～ 2005年：全130号）も「会見詳録」ページに掲載しました。

PDF版には編集できない保護措置をかけています。また、個人情報を保護する必要がある一部の記事は削除していますが、それでも万一、記事執筆者や写真撮影者など関係者の方がネット公開を望まない場合には対応いたしますので、事務局にご連絡ください。

＜法人会員代表変更＞

テレビ神奈川　中村行宏代表取締役社長（旧・牧内良平）

＜訃報＞

清水實会員（ジャパンタイムズ名誉顧問、83歳）が10月２日肝細胞がんのため、元クラブ賞推薦委員の藤田博司会員（共同通信出身、77歳）が同５日急性心不全のため亡くなりました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

HP ➡ http://www.jnpc.or.jp/　NEW!

■会見詳録　10月のアップロード

●研究会　西沢和彦・日本総合研究所上席主任研究員「130兆円は誰のものか―年金運用改革を問う」（9.26）

11月の行事予定（11/4現在）

13㊍	13：30 ～ 15：00　９階宴会場 シリーズ企画「戦後70年　語る・問う」④ 髙木勇樹・元農林水産事務次官
14㊎	14：00 ～ 15：30　10階ホール シリーズ企画「戦後70年　語る・問う」⑤ 山田太一・脚本家
19㊌	13：30 ～ 15：00　10階ホール シリーズ企画「戦後70年　語る・問う」⑥ 小峰隆夫・元経済企画庁調査局長

クラブの電話　ダイヤルイン

●和食レストラン（9階）……☎3503-2723　●会員事務……☎3503-2727
●洋食レストラン（10階）……☎3503-2766　●経　理……☎3503-2728
●貸室予約、宴会打ち合わせ‥☎3503-2724　●クラブ行事への申し込み‥‥☎3503-2722
●受　付……☎3503-2721　●会見申し込みアドレス…kaiken@jnpc.or.jp

会員現況　●法人会員：136社　●基本会員：754人　●個人会員：1,387人
●法人・個人賛助会員：63社・142人　●特別賛助会員：96人
●名誉・功労会員：12人　●学生会員：44人　計：199社・2,435人

会報委員会

委員長＝石川　一郎
委　員＝荒田　茂夫　五十嵐　裕　大寺　廣幸　風間　晋　神田　由紀　北村　節子　佐塚　正樹　高橋　茂　長澤　孝昭　吉野　理佳
（事務局：長谷川和子　村田 茜）
☎03-3503-2752　FAX 03-3503-7271

写真回廊

撮影：川口　敏彦（読売新聞社編集局写真部）

高度1万4千メートルから見た、噴火から2日後の御嶽山。火山灰が火口から広範囲に降り積もった様子が見て取れた。立ち上る噴煙とともに、複数の旧火口の存在にも気づかされた=9月29日、読売新聞社機から

龍神の怒りは収まったか

信仰の山である。剣ヶ峰の山頂にある御嶽神社の奥社は8世紀初頭の創建といわれる。

山の姿は堂々としている。山頂部は台形で、裾野は広い。地元の人は、高くて大きい山を意味する「嶽」の字に、敬意を表す「御」を冠した名をつけた。日本一の高所にある湖や多様な高山植物など、美しい自然も登山客には魅力のようだ。

そんな穏やかなイメージとは裏腹に、地中には恐るべき巨大エネルギーが秘されていたのである。秋の週末の、さわやかな登山風景を一瞬にして地獄絵に塗り替えた。高く上がった噴煙と雨のように降り注いだ噴石は、この山がいまなお活動を続ける現役火山であることを見せつけた。過去1万年の間にマグマ噴火が4回、水蒸気爆発も数百年に1回の割合で起きていたこともわかってきた。

昔、山頂の池に白、黒、赤、青、黄の5つの龍神が棲んでいた。ところが、人が登って来ては池にいたずらをするので龍は怒り、ほかに4つの池を造って別々に棲むようになった――。

この山に伝わる「龍神伝説」である。山頂にある5つの池はかつての噴火口だ。昔の人は、突然、火や石や水蒸気を噴き上げて暴れ出す火山現象を「龍の怒り」になぞらえて畏怖したのだろう。

火山災害では戦後最多の犠牲者を出した今回の噴火は、行方不明者を残したまま、山頂付近での積雪が初めて確認された10月中旬に今季の捜索活動が打ち切られた。来春の雪解けが早からんことを。

（森嶋　幹夫）